

特56

966

台水漫筆
滄興治著

102371-000-5

特56-966

台水漫筆

滄興治/著

M30

EAG-0231



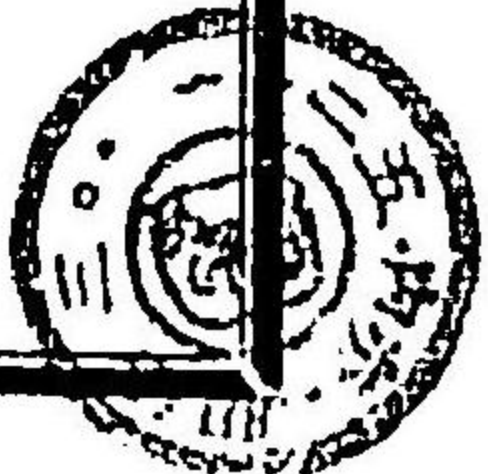


台水漫筆ノ巻首ニ書ス

余は是れ輾轉不遇の一宵生、落魄粗豪の究措大、性甚だ頑愚にして、未だ一藝に通する者、和漢洋の學、僅かに其門戸を窺へども、皆其堂奥の深きに達せず、常に慨然として天下に呼號するの志あれども、奈何せん薄縁棄才に去て、周遊未だ五州に遍ねからず、而かも子然たる宇宙の迷兒となり、空まぐ故山に謫せられ、山野の間に鷄犬を友とす、鬱勃たる霸氣散するに途なく、脾肉凄涼の感益々深くして、胸中の不平愈々多し、噫遣般の心事、誰か能く之を知らん。

余生來多情多血、動もすれば感情に制せられて事を誤る多し、而して其感情は愉快的に停らずして沈鬱的にあつて、樂天的にあらずして厭世的にあり、嘗て東都にあるの日悲歌慷慨彈鋏、擊筑夜半鷄鳴を聴き、衾を蹴りて起ちしことあれども、是れ皆年少客氣の空想ありき、一夕大白を浮べて「壺中日月閑、一酌乾坤大」と歌ひ、天地は高壯に宇宙は悠遠なりと雖も、之を五尺の小天地に収容する豈に難しとせんやと、壯語せまことあれども、今と既に過去の一夢となりぬ、其一度失脚して郷に歸るや、志業輾轉、冷灰枯腸、唯だ空しく秋風辭を吟きて沈鬱、煩悶身の不遇を嘆するあるのみ。

今日孤獨蕭居の境、青山白雲を望んで、轉た人生の無常を觀念、弦月落花に對まては、徐ろに皇天の無情を感念、山野の蕩蕩と會しては深く彼等の薄命なるを憫み、富民豪族の倨傲を



るを見ては、其頭上に鐵拳を加へんと欲す、一友を得ては分る、を悲み、過去を憶ゆて、追懐の涙に咽び、橋下の乞食、月下の啼鳥、皆我が心を動かさざるはなま、而きて朋友知人は余を以て狂愚となま、常に擯斥きて近づかまめす、半世の志業空望に屬ま、落托の身迹一の見るへきなく、只空ましく風月に嘯きて陋屋に整ま、青史を繕きて千古の偉人と語するあるのみ、若ま夫れ余をまて少ましく文學上の素要あらゝめんか、多感多趣なる一篇の哀史を作るに、亦た敢て難まとせざるなり。

嗚呼余は敢て自ら隠退を好むにわらずまて隠退ま、山野にあるを好むにわらずまて山野にわたり、孤忠天地の憐みを受けす、宇宙大なりと雖も、五尺の身を安するに地なく、常に自ら我が薄志弱行を憐む、這般の鬱氣、誰れに向つてか語り、胸中の不平、何處ま向つてか洩さん、乃ち強て硯池ま臨み、秃筆を呵まて漫筆を綴り、以て自ら慰む、然れども哲人まわらずまて哲理を説き、詩人まわらずまて詩學を談ま、文人まわらずまて文章を草す、非哲人の哲理、非詩人の詩非文人の文、寧ろ一笑ま値すれ、望外の幸のみ矣。

明治丁酉一月一日早朝若水ま墨すり流ま一杯の居蘇機嫌に浮れつ、
破窓の下よて
台 水 仙 史 識



目 次

○ 月 光	一 頁
○ 飛 雪	四 頁
○ 落 花	九 頁
○ 戀 愛	一四 頁
○ 新婚を祝す	二二 頁
○ 吾亡弟を憶ゆ	二五 頁
○ 松本參事官を送る	三三 頁
○ 桑嶋蚕遣君を吊ゆ	三五 頁
○ 新聞紙と新聞記者	三七 頁
○ 江水新知事に寄語す	四三 頁
○ 我郷の凱旋軍人を迎ゆ	四六 頁
○ 我郷の青山白水	四七 頁

讀者ニ告ク

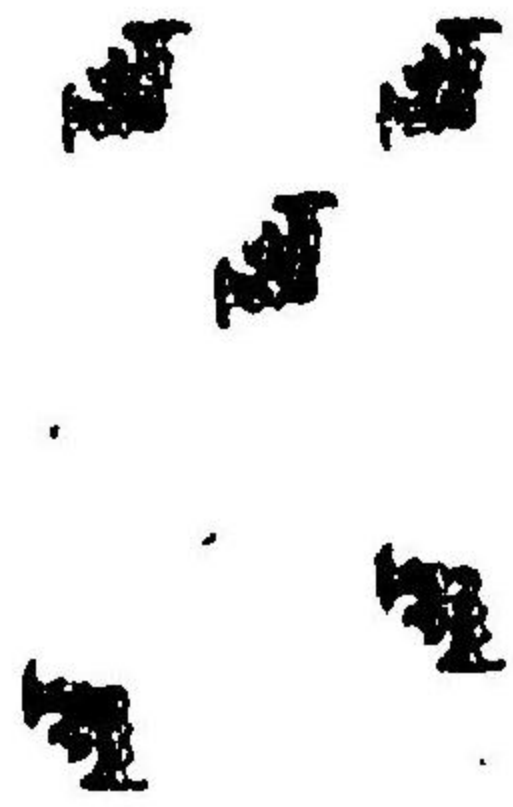
一、予頃日流行感冒の襲ふ所となり床に就くと十餘日、日に相伴ふものと藥瓶のみにて無聊に堪へざるなり東坡曰「因病得閑殊不惡」と、余は此閑日月を利用して一書を編せんと欲し、本書を起稿一週日にして成る、亦た是れ消閑の一樂事のみ。

一、予が此書を著すは敢て天下に頒布せんとするまはあらず、語に曰「貧交莫贈唯多言」と、余は唯だ之を郷國の青年諸友と辱交の全友諸兄とに頒つて、聊か平素の厚情に酬ゆる所あらんとするに在り、其文筆の幼稚、議論の拙劣の如きは問ふ所にあらざるなり。

一、予が特に讀者に望む所は、本書の所論に對して、充分に高教を寄せられんこと是れあり、ソハ向后本書を再版に附するに當り、充分訂正を加えんと欲すればなり。

明治丁酉一月一日

台水仙史再識



台水漫筆

瀧興治著

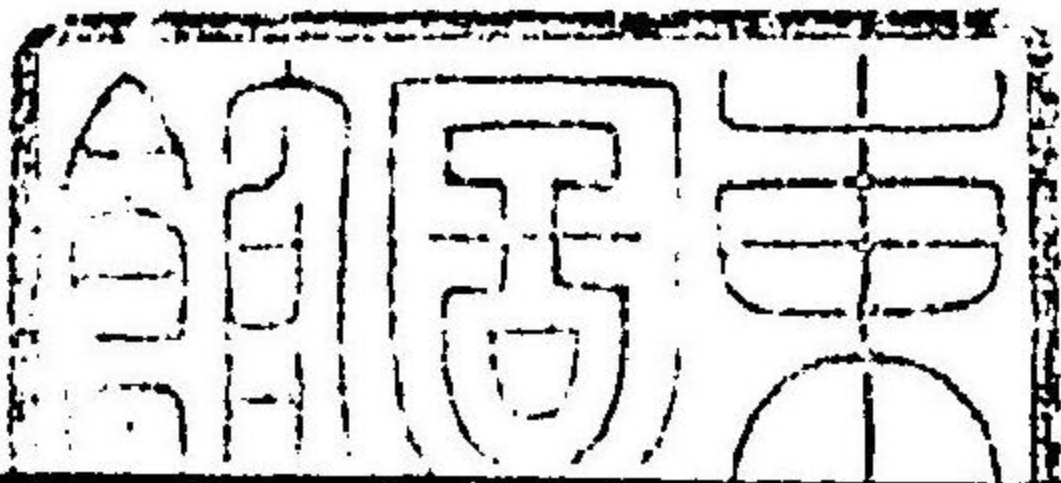
月光

今宵は陰曆の仲秋あり、唐紅の秋の櫻は、爛として錦衣を着け、雲か霞かを疑はしめ、颯々たる秋風が吹き送る砧の聲は、玉を綴れる草間の虫の音と相和して最と賑しく、春にわらぬ田舎の小春を來りける。

天高く氣澄み、大月圓やかにして、霜意野に白く、往來の車の音も鎮まり、世間の人は早や既に夜の衾を重ねて華宵の郷人となり、天地寂寥、雌々たる秋草の間に、望月の影と碎けて瑤玉を敷きたらんが如く、暫時佇立みて眺むれば、月は愈々淡く鮮にありて、今は燈々と照り渡り、吹く風も鳴く虫も、我も只月光の波に沈みて幽靜の

氣骨に徹し、顧みれば袖も裾も皆白く光りて、天地月光の中に入り、我は月中の人となり、「眺むればいたらぬ隈もなかりけり心や月の影に添ふらん」の名句も、徐ろに思ひ出されて、興頻に催し來りければ、輕履一踏、江野町の寓所を出て、殊更道を閑寂する監獄署の横手に取り、舊城趾ある公樂園にとどまりぬ。

天上の月は只一つにして、秋古其色を改めず、幾多治亂興廢の跡を照し來りて、其光依然たりと雖も、田舎にありてと自然都會の月と異なり、須摩。明石の浦邊にあらねども、一種言ふべからざる幽靜の趣味あるなり、堤上に登りて見渡せば、蒼々たる稻田眼下にあり氣は水の如くに澄み、天は鏡の如くに磨かれ、四方の樹林鬱鬱とし



て詩くが如く、素屋の隙影白くして動かず、天地廣くして悠々たり。

仰げば一輪の銀月と冷々天空に懸りて、水精盤の如く茫々たる草野、露結んで風寒く、恰も白菊の咲き亂れたるが如し、万斛の幽邃此中より滴るを覺ゆ、堤下一碧の沼水、微風動きて千波万波碎る處、金鱗閃々として幾段の妙味を加へ、風伯の襲ふとき、稻葉俄に驚き騒ぎ、月光其間を縫ふて、只青光銀色の四散するを見るのみ。

天上の觀を尽し、靜かに堤を下りて園中を消遙すきは玉露袖に滴りて、心何となく潤達に、梢を掠めて渡る風も清玉を帯びて俯す草も、亦其興を添ふるの心地して、滿心の煩悶は一掃して跡なくなりぬ、首を回せば遠山と既に月明の裡に隠れ、近山は次第に積翠の間に遠ざかり、明神山下の燈影と点々として樹間を渡る、森々たる林に木精して、遙か彼方に消を行く砧聲は、何人の打つ唐衣ぞや、天空一碧の間を啼き破る鳥の凄き一聲は。何を悲で斯く訴るにや、物の哀れを告げ知らざんとて、高く低く急に緩に、重く軽く長く短く。響、促織、蟋蟀の鳴く聲は、夜の次第に更け渡るを報きて、轉た淒涼の狀を加へ心は何時しか仙境に入りぬ。

真如の月に對して默想一番すれば、限りなきの感慨と忽ち胸を衝きて、昨年の本月本日に及ぶ、想起す昨年仲秋は九月十四日にて、我精銳なる軍人の手練を測知せざりし、憐むべき彼れ清將等は、翌日の一戦に脆くも敗北きて、朝露の敢果なき命と消を行くことを知るやあらずや、攻るに難く守るに易き、平壤城と大同江とを金城湯地と頼み、三々五々席を連らね、明月に對きて酒を酌み、清樂を弄して孔明にあやからんとせまも、却て其軍機を誤り、遂に再び悔べからざるの創痕を被るに至りぬ。

然る而して昨年我營の夫の顔を照え、万里遠征の勇士を去て感慨滿胸、思を家郷に馳せまめざる清光は、本年

本日依然韓山の野は充ちて、我が先登第一たりし勇士の屍を照らせり、海より出て、海より入り、銀色皓として光りまばゆき氷影は、遼瀋灣頭、幾多身を忘れて國は殉せし、我勇士の英魂を照らせり。

嗚呼昨年の本日、寒風樹端を吹きて夜正に闌あるの時鞭を振て馬を峨々たる一山に立て、俯して敵陣の事情を窺ひ、鐵蹄軽く秋草を踏み碎き、靜かに林を出て、又野に入り、明日作戦の地形を豫測せたり、我勇將謀士は、本年本日の月に對し、果して如何の感想を惹き起せらんか、戦の前途に勇ましく、笑つて出陣したる后、壯烈の氣象に驅られて、單騎敵地に侵入し、天晴れ雄々まき功名遂けて、唐野の露と消ゆらりと我猛武夫は、名譽の戦死を喜んで瞑またるべしと雖も、征清の偉業、遂に我國の勝利を以て終り、凱歌聲裡、其战友は無事に歸郷し、万歳の聲は天地を動し、到る處に祝盃舉げらる、燦爛たる勳章、其胸に懸りて從軍の名譽を表彰する今日、呼べども來らざるを嘆き、待てども還らざるを悲む彼れ戦死者の妻子眷族は、本年本日の明月に對し果して如何の感を惹き起すべきか、抑も亦戦跡夢の如く、身は之れ錦衣都に歸るの人に仿らず、官を失ひ職に離れ、遠く孤嶋に滴せられて配處の月を眺むる、當時の敗將殘卒等は、本年本日の月に對し、果して如何の感を惹き起すべきか。感慨加はり來り、更らに一轉きて我征臺軍人に及ぶ、噫鐵脚以て臺灣の蠻土を踏破き、万里人煙なく食盡き砂を嗜んで、敵情探察の効を了へ、夜三更宿するに家なく、河に漱き戈を枕し、以て帝國軍人たるの本務を盡さんとす我征臺軍人は、今宵の月に對え果して如何なる感かある、霜滿軍營秋氣清、數行過雁月三更あるの時、牀前獨座して、默想一番すれば、如何なる鐵腸と雖も、万里金闕の情溢るべく、家郷遠征の苦を思はざるものいあかるべき。

圓滿する明月は對し、感念々加はりて徘徊佇立するもの歎時、既にして半夜の静寂を破りつゝ、空谷に響く招魂社畔の鐘聲に驚かされて歸路に向へば、玲瓏たる月影は愈々白く、沈々たる夜色は益々寂寥たり。

寄語す皓々たる月を對して、物質以外の美を感ずる能はそ、車の塵に肺を損ね、明神山下の混雑中に更闌くる迄消遙して、鼻を撲つ白粉の香又は油臭き黒髪の逐風臭きて、一夜の快を盡せりとなす青年輩よ、何故に天の風興せし自然界の美を捨て、心靈の仙境に入る能はずして、醜穢ある人間の肉に迷ふや、何ぞ肉体の奴隷に甘せんと欲するや、願くは開悟一番して來れ、必ずや物質以外に美の神髓を認むべく、心は高尚幽遠なる自然界に向つて飛ばん。

(明治乙未歲陰曆八月十五日於宇陽客舎)

思へいてぬ人の過き行く野山にも秋は秋なる月やすむらん 定 家

飛 雪

灰色の雪空、重げに掻き曇りて縫目を見せず、肌を研り頬を掠めて吹き來る風は最も強く、草木は悲鳴去、飛鳥は足を早めて林に歸るや、唯だ見る天邊より落下し來る、羽々綿の如き一連帯の白衣、忽ちにまで見渡す限りに廣かき山も丘も森も林も、只中好く一枚の衾に被はれ、晝の睡りに沈みしと見しは是れ一團の雪にまて、續粉地を撲ちて醜る狀、鷄毛の驚けるにも似たり、静かなるは香なくして花を散り、亂る、は聲なくして鷺と飛び、直下するものは素練の如く、激せるものゝ白波の如く、地に落ちて千碎萬碎し去れば、玉屑片々、目の極むる處凡

て是を白妙のみ。

満目皓々一點の塵多く、白醜々たる銀世界をば、意地悪く二線を畫し行く車の跡も、直ちに畫されは直ちに掻き消され、屋根傾き離破れ、壁落ち柱朽ち、大抵の雨戸は剛情よまて、容易く主人の入るを許さざる茅屋も、今日に限りて悉く白粉に塗られ、亦平日の如き剛くき面色を示さず、常に嚴めしく軒上に控ゆる鬼瓦も、今日は見せんとて、最も優しげある綿帽子を擔ぎ、彼の白く美しき寝衣をまを包まれり。

見渡せば雪を撲たきて、是を以て堪へ切きぬと手を口に蓋ひて、茫然天上を眺むる飽賢もあれば、惜氣もなく白き脛露はし、裾を握り一散に駈け出と少女もあり、赤き頬を一層赤め、味噌漉下けて走る下女もあれば、短き法被の袖口もて鼻拭ひつゝ、轆を握りて力なく歸る車夫もあり、常には往來繁き街衢さへ、行きかみ人はハハハに散去り、只僅かに二重外套の兩翼を卷きつゝ、鳥の如く歩む客と、合羽目深かき竹の兒笠を戴き、狸の如く走る小僧と可愛き花かんざしに雪の花片を載せて、學校に急ぐ少女と、石盤背負て勇ましく疾驅する健兒との外は、往來の人跡全く絶へて、天地轉々寂寥たり。

余は街上に佇立して四望すると少時、氣は雪と共に清く、心神は自ら澄徹するを覺ゆまも、寒氣は凜々として骨を刺し、朔風は臘々として面を拂ひ、手足の指頭墜ちんと欲し、雪の礫は遠慮なく襟元に闖入し、最早我慢に堪へ切れねば、歩を家路に回し爐を擁して茶を汲み、窓を排して清景に對しり。

屋外の珠玉亂るゝと益々盛んに、階前の翠竹は悉く銀華を着け、庭上の古梅は滿枝に香あき花を綴り其眺望は清くまて面白きこと紅花も勝り、彌生の春にも超はべく、紀貫之の「霞たち木の芽も春の雪降れば花なき里も

花をちりける」の名句も徐ろに思はれて、興味湧くが如く、冷かきとも以て情を温むるに足り、紀納言の「或
逐風不還、如振群鶴之毛、疑綴衆狐腋、觀天皎々然影亂、瓢爾質輕、懸天有色、墜地無聲」とは、眞に吾人を欺
かざるを覺ゆ、其天に懸りて色あり、地は墜ちて聲なきの雪は、如何に詫しき苦家にも、如何に汚せき賤が伏屋
にも積り網を繕ふ漁翁の邊をも、無心に細綿ぬ村娘の傍をも照えて、貴賤貧富の隔てなく均しく萬人の目を樂ま
しめ、我が念を去て一片の邪なきを得せしめ、我が心をして悠々愛みきを得せしむ、邪なき愛なきの念は天真と
あり、清淨無垢となり、浩々乎飄々然として、心は何時ぞか仙境とたゞりぬ。

極目千里の銀世界に對して、冥想一番とせり、吾人幸福ある雪見の客は、亦全時に世の最も憫むべき雪に泣く人
も向つて、空情を表せざるべからず、古への俳人某の妻は、夫の雪夜に小奴を伴ひて俳庭に赴かんとするを止め
て「我が子あら伴には逆し夜の雪」と歌ひたるにあらすや、某貴人は哀れなる酒屋の小僧を見て「雪の日や彼れ
も人の子梅拾ひ」と詠したるにあらすや、清少納言の「下賤の家に雪の降るたるまた月のさし入りたるも最と口
惜し」といぬが如きは、豈に無慈悲の話にあらずや。

高樓酒を呼んで雪景を賞するの人々よ、檐下に喧々として食を求むるの群雀、街上を疾驅きて食に訴ゆるの瘦犬
を見るに於ては、胸中自ら哀憐の情起るにあらすや、然るに社會の下層は、此禽獸もそら尙ほ及ばざる、憫む
べき人間の存在することを知らざるか、其富有の徒が美酒を酌み佳肴に飽き、美姬を擁し盛衣を重ねて清景を眺
むる間に、一方には頽簷破壁、雪は座上に積りて堆をゑし、衣は襤褸にして寒威肌に徹し、薪炭窮乏して暖を接
るに由なく、家に檐石の儲なくして炊烟起らず、老翁は病床に臥して寒に號び、稚童は無心にして餓に泣く貧
民あり、之を思ひ彼を考ゆれば、吾人は悵然として轉た憂愁の情に禁へざるなり。

優勝劣敗、弱肉強食は、天地自然の理にして、人力の得て如何ともする能とざる所ありと雖も、世の開明に進む
に從て、益々其勢を助長するの傾向あるに至りては、吾人は己むる彼等弱者の爲めに、其不幸を訴へざるべか
らざるあり、社會の半數以上を占むる處の蠢々たる貧民が、饑に泣き寒に叫ぶの慘境に沈落せるにも拘らず、無
情にも之を冷視して、利己の暴慾を逞ゆせんと欲する富民豪族に對ては、吾人之天道の敵とて是とて戦はざ
るべからざるなり。

思ふに彼貧民は中より、其性懶惰蠢愚として遂に糊口に窮するものもあるべく、世務の複雑を加ふるに従ひ、
其甘味を嘗むるに至らずして、早くも其酸味に辟易せざる怯懦の徒もあるべきあり、然りと雖も一方は天災人
禍の交々も到るに及んで、其活路を失ひ、老て安んずる能はず、餓て食ふ能はず、凍へて衣を穿る能はず、病んで
醫する能はず、幼にして依るべき貧民も亦た決て勘なからざるあり、而して此等の貧民も亦た吾人の同胞な
るを知らば、豈に痛歎慙惻に堪ゆ可けんや。

自由競争の制度發達するに従て、劣弱敗削の民發生するに至るは、固より當然のことありと雖も、其過失怠慢の
みは結果にあらざる貧民に對ては、吾人の決して傍觀坐視せざるべき非ず、必ずや之に相當の救助を施すべきを
信するあり、即ち家なき人に居所を給し、食なき輩は食を與へ、衣なき徒は衣を施す、病める者に醫藥
を加へざるべからず、殊に失業空職の貧民に對しては、社會之多少之を救済するの責任あるなり、何と云はれば彼
等が失業空職に陥る所以のものと、所謂生産過剩、器械の發明、自由競争等、社會の經濟組織が彼等を驅りて、

其今日あるに到らめたるもれければなり、果して然らば是等の勢力さる、大に社會の進歩を促またるものなれり、社會之進歩の全局より生きたる利益を占領し、國際間に於ける利益競争の一大戰場に於て、美事に凱旋の名譽を握取したる代りに、其進歩の犠牲に供せられたる負傷者に對しては、之に相當の看護を施さ、以て既往の功勞に報むざるべからず。

貧民救濟の道一に去て足らずと雖も、吾人が特に擇ばんと欲する之慈善的の救助にあり、夫れ世に慈善より愉快なるはなかるべく、陰徳より美事あるはなかるべし、想へ慈善的救助の、如何に貧民をして恩を感せしむることの大なるかを、彼の一碗の冷飯、若古まの衣、澤庵の端片と雖も、貧民に於て一度慈善家の仁心に出づるを知らんか、以て山海の珍味として之を賞翫すべく、以て綾羅錦繡とて去て之を感納すべきや世の人情なり、而して此等の物たる富人にありては、敢て惜むべき程のものあらざるを去て、彼の塵芥もたも値せざるに非ずや、時又感ぜては花よも一片の涙を渡ぐ人々よ、卿等が花に眠り月よ囁く間よ、社會の下層よと餓え泣き寒に叫ぶ民あるを知らば、何ぞ其遊興費の一部を割きて、此憫むべき無告の貧民を救濟せざるや。

雪に對して感慨湧くが如し、首を上げば、翩躚として飛舞する雪花も漸く静うに、夕陽今や西山に落ちて天地方に沈まんとし、爐中の炭火既に盡きて寒氣身に迫り、潜々たる涙之何時しか雙袖を潤して、心身共に氷結するを覺ゆ。

雲横秦嶺家何在。雪擁藍關馬不前。

韓退之

落花

陽氣一度動いて萬物春ならざるをなし、春は萬物の慈母なり、造化の賜なり、千樹萬草、此温き慈母の恩恵を浴して葉を伸ばし、花を開き、以て清らかなる成育を遂ぐ、皇天の恩、造化の恵、是に於てか大なり。

春の恩恵は亦た人間も落ち、其陽氣は必ず人間の上に動く、看よ勞役の外自然の美を感せざるに似たる車夫も、霞雲蹙蹙たる櫻花に對しては、轅を止めて徐ろに風流の心を起すにあらざるや、無情殘忍の無頼漢と雖も目前に爛熳たる櫻花を見ては、尙ほ歩を止めて之を賞翫するにあらざるや、然り吾人々間が苦痛を感ずる最も掛なく、快樂を感ずる最も多きは、實に春日を以て第一となすなり。

余一日天晴れ日麗かなるに際して、友人篠崎奇山と相携へて明神公園に散策す、時に落花点々風に隨て散々萬樹花飛んで春寂々、「見る人もなくて落ちぬる奥山の櫻は春の錦なり矣」と古の歌人が評せし花王の全盛も、はや一瞥夢中も過ぎ去り、其蕭條たる光景は徐ろに秋を思はしめ、杜牧之にあらざるも、吾人をして轉た斷腸に堪へざらむ。

殊に吾人の心を傷ましめたるものは、上枝に二三輪の殘紅を留めしもの、前日の狂風に打たれ、悄然として首を俯し、其狼籍を悲まむが如きものは是れなり、憐れ彼の無情の風は花を載せて行きし乎、春を載せて去りま乎、余當時無言の殘花に對して惜別の涙あり。

然りと雖も余は嘗て悲むものにわらず、落花に對して一篇の送辭なかるべからず、詩人歌ふて曰く雨露の中にも天ありと、然り造化が四時をして無聲無臭の間も順還せしめ、萬物をして有聲有臭の中も生育せしむるもの、皆

神聖なる秘密を包蔵せざるなし、一滴の雨露と雖も至細よ之を觀察せば、以て造化の妙機を了するに餘あり、數
 点の櫻花も善く觀察するに於ては、焉ぞ天地の心を知り難からんや、之を察し之を考へ、之を研さ之を究め、是
 に由りて啓發され、是に由りて誘導せらるゝ、あくんば、茫々たる宇宙の大も無量なる天地の美も、竟に是れ無味
 乾燥にして了らんのみ、「つゆと世つゆと消えぬる我身のな」此殘酷なる歲月の前よ、櫻の咲きて七日に散る
 も其天より受けたる職分を尽すに外ならず、櫻の斯く敢果なく散ると雖も花の見する誠とこそ言ふべけれ、「惜ま
 る、ほど散りやとし櫻花」櫻と咲きて七日に散るばこそ人々痛く名残を惜まる、なれ、「才子佳人薄命多」短命
 なればこそ、才子佳人は人々惜まる、なれ、櫻にして若き松の千歳わらん乎、誰れか亦た之を愛惜するものあら
 んや、人にまて若き千歳の壽かあん乎、誰れか亦才子佳人とまて之を歡迎せんや、櫻の七日にまて散るも、松の
 千歳迄榮ゆるも、是れ各々其性分を尽すのみ、豈櫻の心と七日にして、松の心は千歳なりと云ふべけんや。
 「梅は飛び櫻は散る、世の中に何とて松はへれなるらん」松とつとあひく世の上の人に唱ふるも、其壽千
 歳を有てはなり、「是を種とてのなき生を得て、聊かも己を忘れて他を羨むの心なく、朝なくいと快よく見事に咲
 きては、受けたる性分をつくま、枯る、こそ朝顔の見する誠なれ」朝顔は露のひぬまの榮にて、朝日の照る前に
 凋めばこそ、世人に斯くと愛惜せらるゝなれ、散るへき時に散ることを寧ろ花の本望とや言はん。

天地有萬古、此身不再得、人生只百年、此日最易過、幸生其間者、不可不知有生之樂、亦不可不懷虛生之憂と、
 歴世主義と云ひ、樂天主義と云ふも、是れ只楯の半面を觀察せざるのみ、事よ善惡有り物よ表裏あり、時の迅速

あるを見るもの、諸行の無常なるを知る者、樂事の常よ甚なく、苦心の常よ多きを感ずるもの、誰れか天邊圓月
 少、世上苦人多の嘆を發せざらん、誰れの歴世の理を知るを認めざらん、誰れか虚世の憂を懷とざらん、然れども
 翻りて、死は天地の間宇宙の中、有性有靈者の踏むべき順序よいて、造化の玄妙此間よ存するを悟らば、世間の
 如何よ愛とへく、有生の樂如何よ大なるかを思ふべし。

若し夫れ楯の半面より觀すれば、人間は花の如く、人間の榮華は花の露の如き、花は落ち其露は消ゆ、「思へ世
 に有りやな一やと問ふ人も問はる、人も誰れかとまらん」嗚呼昨日の淵は今日の瀬となるもの、何ぞ獨り飛鳥川の
 みならん、朝に生ありて夕に死あるもの、何ぞ獨り蜉蝣のみならん、人生無百歳、百歳復如何、古來豪傑士、共
 已歸山河、音調凄凉、銷魂の種をらざるは莫き、不死の樂は需め難く、不老の神仙は既に遠く去る人に百歳の壽
 なく、英雄豪傑の士は皆既に白骨と化せ、人元還山にわらざるも、豈斷腸せざらんや豈涙を吞まざらんや。

人間に向て殘酷なるは時の宣告に若くものなま、諸行無常の響ゆるもの、豈に獨り祇園精舎の鐘の聲のみならん
 や、盛者必衰の理を明かにするもの、豈に沙羅双樹の花の色のみならんや、朝顔の花も露のひぬ間の榮にて、
 夕風寒く吹きぬれば、憐れ萎み落つること、浮世のあらひ是非奇きこと思ふへま、朝露のもろきは人の命にて、
 盛んある人もついに衰ひ、猛き人もいつかは亡ぶ、馬上青年過、世平白髮多、の嘆を過ぐまは、昨日少年今白骨
 と化するに至る、是とぞ誠よ浮世のあらひとこと言ふべけれ。

青年重ねて來らま、一日再び晨あり難ま、此言悲愴を極めたりと雖も、儘か眞理たるを失はま、「昨日紅顏今
 白頭」麗人長く麗あらず、紅顔あらく紅あらず、光陰去り易く業成り難ま、無常ある歲月は人を載せて後よ走り

郷南洲が天下の重望を双肩に擔ひながら、從容と去て死し就き去が爲めは「人一代名と未代」肉體は一代より土に朽つるも、其名は遠く千歳に残らんのみ。

思ふてこゝに到きは、余亦何ぞ人生の敢果なきを悲まむ、何ぞ落花の悄然たるを哀まんや、櫻は七日の壽命、安んぞ、朝顔は一日の壽命を樂む、余も亦た此の世に安んぞ天授の一生を樂まんのみ、於是乎吾人の世間の如何も愛すべく、有生の如何も樂み乎を聞きり上天の攝理の如何も大に、宇宙の理法の如何も圓滿なる乎を知れり。

明神山は遊ぶの即夜、獨り案を凭りて此文を草と、青燈影淡く心腑自ら爽あり、艸し終り窓を排して天外を望めば、夜色沈々、月光皓々、萬物皆を眠り天地獨り醒む。

恨まき山のはかげの遠櫻遅しく咲くは遅く散りけり 經 信

戀 愛

詩人スカットは歌て曰く「戀愛の徳や大あり、泰平の世には羊飼の角笛に鳴り、戦亂の世には勇士の馬上に乗り美ある書院に於ては麗はまき衣服着て、賤が伏屋には縁を草の上に踊る、戀愛は陣屋にも宮室にも森影にも、下界の人亦た天上の天使にも宿らん、戀愛は即ち天、天は即ち戀愛あり」と。

夫れ戀愛は高尚あり、神聖あり、人界を潤し限りなき平和の海洋なり、社會に湧き出づる限りなき快樂は源流なり、彼の忠信と言へ、孝悌と言へ、義侠と言へ、博愛と言へ、是れ皆最も神聖に去て最も高尚なる、戀愛の活泉より迸出する清流にあらざるはなき。

戀愛は是を野山の若縁を染め出す一服の顔料に去て、浮世の春に花咲く櫻花あり、造化が靈妙ある筆より描き出す一幅の丹青に去て、無邊の天地を、裏む錦繡あり、時に取りては春とあり、樹に於ては花とあり、人に顯きての情とある、而して其情の儼然として男女の心靈に映するや、乍ちより其苦痛を樂まめ、其慟哭を笑はまめ其憤怒を和けまむ、去まば人は去て一度之を會するときは、常々其生命の全般を捧げて、狂喜歡迎せずんば己まざるあり、蓋し人界は素、乾燥冷峭、動もまは人を去て、人生は無常を歎せまめ、希望心を干殺して厭世家たり悲觀者たらまめんとぞ、然れども幸に戀愛ある活泉あり、以て靈力を人生に供給す、若し夫を此活泉を世界の門前より撤せんか、全世界は茫漠暗懨たる無聲無色に一大沙漠と變え、社會は粘着力を失ふて支離解体するに至らん、若し夫れ戀愛を宇宙の門戸より除らんか、宇宙は噴火山は燒跡の如く、四邊蕭索、人間は都て累々たる燒石と化るとるに至らん。

去れと彼の六塵の慾を離れたる兼行法師が、「色好め色好め、色好まぬと玉の盃底なきが如し」と叫びたるが如き嚴正なまて武骨なる悟愈先生が「人よ色情なきは天よ雲なきが如し、雲なく去て天下悉く乾燥す、是れ最も恐るべきことあり」と教へたる如き、釋氏が人間界を以て色界となせる如きは良し故ある也、洵に「戀せずば人は心のちからまき物の哀れもこよりぞ知る」に去て、世の中の人の心は花染のうつろひ易き色よぞあるなり。

思ふに戀愛の道は原人時代の上古より、今日に到る迄始終一貫して變せざりしものにして、洋の東西を論せむ、人種の異同を問はせ、天地と共に推遷し來りしなり、我國上古に在りて此戀は、淳朴甚だ高尚なるものにして、神武天皇の皇后を迎へ給へしより以來、歴朝運綿として上は九重の雲深きより、下は質朴なる人民の間に至る迄

修飾なき戀の跡ありしことは、歴史も照去て明かある實事なり、乞ふ古人の歌ひ出したる跡を見よ、田子の浦に富士を見、三笠山に月を眺め、明石激に舟を望み、芳野山に花を賞するに非ざれば、唯可憐なる戀歌にあらざりしか、彼の帥宮(後醍醐帝)が、加茂基久の娘を深く愛せられ、「數ならぬみの、御山の夕時雨つれなき松は降るのへもなま」との戀歌を寄せ給ひし如き、誰ぞの其直截にして切なる戀情に涙を流さざる者あらんや。

戀愛の勢力は洪大無邊にして、人間の情界を支配せ、若し夫れ其前に跪かざるものあらば、是を人にして人にあらず、鬼神にあらずんば即ち金佛なり、彼の勇武絶倫、一世を翻弄するの英雄豪傑も、博學達識、萬人に超過する學者才子も、戀愛の階前には跪かざるべからず、切なる戀情の爲めには、蘇張も其辨を失ひ、長平も其智を失ひ、韓孔も其略を失ひ、孟賁も其勇を失ひ、陶倚も其富を失ふに至らん、情人か一掬の涙には、怒髮冠を衝く荒武者も泣き、佳人が清麗の笑波には、惡鬼も爲めに其角を撞ゆる、なり。

看よ花の如き西施か一點の朱唇何あらん、然れども其眼底秋波を湛ゆるときは、木腸吳兒も一刀兩断するを得ざりしにあらずや、曠世の偉業を試みんと欲し鐵馬玉鞍ナイルの河に沿ふて下りたるアントニーも、クレパトラの妖顔一度其瞳球に映えては、之を兩断して國體の靈を除く能はざりしにあらずや、氣宇世界を呑んで快樂の犠牲に供せんとせしナポレオンも、尙ほジョセヒンの切情を排する能はざりしにあらずや、豺狼の如き武士も一度中將姫の容姿を見ては、心慌惚として之を斬るに忍びざりしにあらずや、猛虎の如き五郎時致も、少將と別れを惜んで不覺の涙に咽びまにあらずや、近時の英傑フランセー將軍も、情人ボンヌーの爲めには身を戰場に曝らま、骨を馬革に包む能とせまて、一命を墓前に手向けたるにあらずや、天の端より地の隅迄を呑まんとせま野心

家ハートルも、オシャールの顔色に迷ふては、敢なく一片の煙りと化まざるにあらずや、戀愛の勢力豈に夫れ大ならせせんや。

戀愛の勢力至大なるは今時に、其變化は誠に神邊不可思議に去て、神出鬼没、得て端倪をべらんと、或時は天使となり、人を去て圓滿活大、黄金世界の感あらまめ、或時には亦た惡魔となり、人を去て失意落膽、暗黒世界の感あらまむ、其佳人か一點の朱唇、紅の蕾を綻ばし、涼眸秋波を湛ゆるときは於ては、良心も屢々其光輝を失ひ意識も遂に其影を潜む、人一度露の命の花の姿に心を迷はさんか、其敢果なき戀の爲めには、惡事醜行に身を汚ま、竟に鐵窟の本に苦呻するものもあらん、或之天地の間に唯一の生命を棄て、敢なき最期を遂ぐるものもあらん、或は毒藥刀光の悲劇を演出するものもあらん、古へは百夜通ひて一夜の艶語に、憐き深草の露と消ゆ行きたる人もあり、褒似の一笑と其宗家とを交換まて、惜まざりま君主もあるなり、戀を指して曲者といふも、亦さ理なきにあらざるなり。

蓋し婦人の胸は圓滿なる愛情の凝集する処なり、故に甚だ温かく、甚だ優しく、甚だ感強く、甚だ全情に切なり、而まて男子の胸は活氣ある愛情の充滿する処あり、故に甚だ猛烈に、甚だ熱心に、甚だ信切に、甚だ爽快なり、去れば婦人が温かにして優しき愛情あり、精神鐵の如き六尺の男子も我を忘れて、嬢か一夕の愛に其身命を抛ちて惜まざるに至り、男子が熱心に去て爽快なる愛情は、直ちに高潔純白なる婦人の心を動かま、郎か一夜の情けに百年の身を托して、苦樂を共にせんと欲するに至るなり。

夫れ男子は其性剛まて女子は其性柔あり、故に彼の優に去て柔まき女性と、剛まて強き男性と相交際すると

さよ於ては、剛柔善く調和きて、兩者の意氣相投合ふ、兩性の愛情更らに之を戀着せまむるを以て、一層其愉快を強めまむ、即ち人生最上の快樂は男女交際の間に在りて存するを知るべき。

抑も愛の最も切あるもの、我を先づ彼を愛せると全時に、彼を亦我を對きて愛を寄せ、愛の鎖鎖を以て彼我の心情を堅く結合せざるの時あり、是を所謂彼我の胸中既高尙清潔、一種美妙なる戀愛の起りまなり、而して此戀愛あるものと、人生の最も秘密とする所もきて、且は人の切を發洩せんと欲する所あり、然り人の言とんと欲していふ能はず、漏さんと欲して漏る能はざる所の、實は戀の情より切なるはあらざるあり、故に戀愛の情一度男女の胸中よ起るや、嚴冬俄か春を生ず、雪中頓に花を開くの觀を呈す、水の潺々をきて溪間を流れ、木の葉の下を潜りて海に達せんとするが如く、鶯の幽谷を出て林間を尋ねて、喬木よ移らんと欲するが如く飛揚迂曲して、其到らんと欲する處よ達せざれば、決して休まざるあり。

然りと雖も之を發洩すること最も難く、之を發洩せざることに愈々難き、若し夫を一度其發洩の道を誤らんか、神聖高潔なる戀愛は茲に一變きて、淫猥厭べきの現象を呈するに至るべく、若し之をきて發洩せざらば、心中鬱々、顔色憔悴、恍惚とて無名の奇病とあり、美妙聖潔なる戀愛は變きて、醜穢忌むべき不埒の行を爲す、以て切ある戀情を發洩するに至るべきあり。

元來男女は交際は二種の別あり、一を情交と言ひ一を肉交と云ふ、而して之を愛情の上より區別せば、一と眞愛より一と肉愛なり、其情交とは男女互に高尙よきて清潔なる、新鮮よきて美妙なる、温愛の情を通ず、相互に愛慕の情を慰むるものと言ひ、肉交といふ男女兩性相互に、甚だ狭く、甚だ卑く、甚だ忌み易く、甚だ厭き易

き肉身上の情慾を通きて、極めて下卑なる愉快を貪るものと云ふなり。

然り而して從來我國人は、情交と肉交とを混淆す、心愛と肉愛とを全一視し、情交を以て直ち肉交と一、眞愛を以て直ち肉愛と一、汚劣なる肉交の外、亦た男女の交際は存せざるの如く見做したりき、去は日本の風俗習慣と、凡ての男女は其情交を爲すことを禁ず、男女兩性を以て決して近づかめせ、唯々婦女を深窓の中よ閉ぢ込め、堅く兩性の交際を遮断す、以て漸く其節操を維持せんと欲したり、是を恰も魚を井中に放ちたるが如き、彼を曾て大海の廣さを知らざるあり、尙ほ恰も鶯を籠中に閉ぢ込めたるが如き、彼を曾て喬木に囀ることを得ざるなり、彼を既に幾度か情交の念發作せり、然るをも快く之を行ふことを禁せらるり、是於乎彼を自身も其風習に慣き、情交によりて散々得べき愛情をば、肉交よあらざれば遂げ難きものと誤認す、肉交を切望きて己まざるに至る、故に遇々男子と相會するや、其美なる情交を感するに違はらざるを、春情先づ動き、恍惚、其風姿を慕ひ、寢ての夢、起ては恍、幻の迷の間に分け入りて、竟に肉慾の奴隷であるに至る、悲むべき哉。

古來男女の情交を禁ずるは、獨り我國のみならず、儒教の専ら行はるる國に於ては、皆然らざるものありし假令之を嚴禁せざるものと雖も、公然之を行ふことを嚴制せり、彼の聖人の教へにも「男女七歳にして席を全ふせず」とあるが如く妙齡の男女をして相近らしめば、直ちに肉交に陥るものと誤認し、堅く男女の相見を嚴禁しり、故に偶々情を以て交はる男女あらば、既に聖人の教へに反り、人倫の道に背きたるものとなし、之を排斥せざるなし、而して我國人は古へより、此窮屈なる道徳を遵奉す、此堅苦まき道徳の家庭に成長きたるを以て、今日に至るも尙や男女間に情交の存するを解せず、世の道徳家を以て自ら任する先生も、亦た「遠く近き

「男女の中」と唱へて、男女の交際を厳制し、婦女子の妙齡に達するときは、直に之を閨門の中に閉鎖し、全く社會との交際を絶ち、以て輕忽の舉動ならまめんと欲せり。

若夫夫を我國をして、港を鎖し閨門を堅め、世界列國と好を通せざりし、三十年前の日本の如くあらまめば即ち可あり、然れども港を開き好を通せ、憲制を布き議會を起し、開國進取の國是を定めたる我國にして、獨り婦女子の交際を束縛し、彼を以て文明場裡の新空氣を呼吸せしめざらんと欲するは、豈是を不倫の甚だしきものにや、是を豈蠻行の甚だしきものに非をや。

夫を男女互に相愛し、相慕ふの情は、是を兩者の天性に出せるものにして、人力を以て之を抑制すべからざるなり、男の性は固と剛にして陽あり、故に男と男と相交るときは、陽電と陽電と相接するが如く、時に或は和し難くして、其交際は竟に親密なるを得ざることあり、女の性は柔にして陰なり、故に女と女と相交はるときと、陰電と陰電と相觸る、が如く、意氣の當合すること稀にまて、其交際は竟に親密なるを得ざるとあり、獨り男女の交際に至りては、陰陽剛柔善く相合まて一種言ふべからざる美妙の快樂を生ぜ、始めて兩性固有の美德を發達するを得べし、然るに強て此高尚清潔なる情の交を禁し、年少の男女を去て相近づかまめざるに於ては、恰も海濱の草木が風に遮らまて、其枝を直伸すること能はざるが如く、固有の情を迂曲まて無理に其秘密を發漏せまめんとするを以て、元來情交に熱心あるものと雖も、竟に充分なる情交を行ふ能はまて、肉交によりて僅らに之を發漏せんと欲せ、人目の關を破りて不埒の行を爲すに到る、滔々皆然らざるはあま、故に世人が男女兩性の間に其情愛を他に與ふるを制し、強て彼等が高尚愉快なる情の交を禁せると、是を男女の交際を以て肉交のみとあし

人生固有の快樂を殺ぎて、之を禽獸界に陥しいる、ものどもふべ、嗚嘆すべき哉。

蓋し人間は肉交のみを以て満足するものにあらず、肉慾の奴隸となるを甘とするものにあらずあり、男女互に相慕ふの情は、素と其肉交を望むが故にあらずあり、其未だ一點穢さをざる清淨の心を以て、高潔美妙なる互の愛情を通し清潔なる應對の間に人生最上の樂を分たんとするにあり、而まて其快味の至大至重なる、到底彼の下賤卑近ある肉交の快樂と比すべきに非ざるあり、試みに其肉交の友とまて、神も許ま人も許まざる夫婦の間ま於て、見よ、社會公衆の目前に於て父母兄弟の面前ま於て公然肉交の約束を結びたる夫婦と雖も、亦た情交の大切あるを重んぜ、情交の愉快なるを感するにあらずや、隅田川よ「妻を忍び子を尋ねるも、思ひは全き戀路なまは」どあるが如き、加賀の千代が、「起て見つ寐て見つ蚊帳の廣さ哉」と嘆まて、亡き夫を慕ひま如き「變らまよ變りもせま未かけて思ふ契りは此世のみかは」と吟まて、臨終の際に再び夫婦の盃を爲すが如き、兒孫膝を廻りて團欒する間よ、銀婚式を擧げ、金婚式を擧げ、金剛石式を擧ぐるが如き、皆是を人間が肉交のみを以て満足するものにあらず、情慾の奴隸となるを以て甘とするものにあらずあるを證するまあらまや。

之を要するま吾人は年少男女の間ま存する戀愛の情は、人力を以て到底之を抑制とべからざるを知る、故に男女の情交あるものは、人生の生活上ま最も必要なるを信するものあり、然れども學淺く識少く、徳義の何者なるを解せざる男女の間まありては、情交の最も危険なるを信するものあり、殊に今日の如く風紀紊ま、徳義地を拂ふの時代ま於て、妙齡の男女相會するときは、動もときは惡魔の誘惑を退け難く、以心傳心、目、物を言ひ、手障り足觸り、春情先づ動きて、遂に爾然とまて罪を侵とに至るの風あり、故に吾人は彼の密室内ま悚然とまて徳

義の制裁を恐き、深夜尙ほ且つ肅然と去て、襟を正ふする男女の間よわらざれば、漫り又情交を許し能はざるを信するものあり。

芳年誰惜去如水。春困著人倦梳洗。夜來不雨潤天街。滿院楊花飛不起。

新婚ヲ祝ス

春野子名は縁、此頃櫻木花子と新たに婚す、縁は寛大温良、風姿清爽、威ありて猛からず、花子は芳尚僅かよ十七、花顔玉容、淑徳鐵の如き、的よ是を君子淑女の好配偶あり、合璧の約成るの日余招かきて其式を陪と、余新婚を祝するの辭を流べて曰く「雙栖に苦痛多く孤獨は快樂多き」とと文豪ジョンソンが婚姻論中の一節あり、夫と人の生を天地間に享くるや、僅か五十年の客たるも過ぎと、此五十の短日月を以て、洵も人生の命數なりとせば、吾人は雖も雙栖の苦痛を避け、孤獨の境遇に一生を終らんか、抑も亦た孤獨の無聊を避け、多少の苦痛を忍んで雙栖の快樂を嘗むべきか、獨身あるも五十年の命數に過ぎと、雙栖とるも露の命の客たるに過ぎととせば、孤獨を擇ばんか將た雙栖を望まんか是を實に人生の一疑問あり。

抑も結婚あるものは、實に男女兩性の嗜好心に出づるにあらざりて、造化の眞意に起因するものあることは、獨り靈性ある人間のみならず、秋の奥山に妻戀ふて鳴く牡鹿の聲を聴くも、亦た以て之を了解するに難らざるなり、既に男女相互の愛情、夫婦雙栖の慾望と、動物の天稟に出で造化の眞意に起因するものたる以上は、強て兩性の交通を遮断去、夫婦雙栖の慾望を切斷せんと欲するは、好んで人倫は大道を破り、造化の眞意に背戾するも

これにあらざりて何ぞや。

獨人ドットル、ウィッス氏曰く「幸福ある配偶は人心を形くるに最も適當なる法にまて、亦た同時に改良するを得るあり、智能、道徳此處に在りて靈力と愉快とを得へく、慈仁、溫柔、忍耐の美德、此處に在りて美麗ある果實を結び、威力は総て破らざり、暴力は総て壓せらざり、共同一致の心此處に在りて益々其活力を發揮し、愛情此處に在りて愈々眞善とあり眞美となる、故に世界に於て愛情が心と附着する間は、道徳尙ほ其根底を保つを得へく、配偶にまて尙や神聖ありとせらる、間は、時勢は收斂未だ全く勝利を得る能はざるあり」と夫を然り多情動物の集合たる此人間社會に於て何者か能く愛なくして助く者あらんや、英雄が威權を愛し、學者が智識を愛し、商人が黄金を愛し、才子が名譽を愛する如き、皆是を人間の多情多愛なるを証するにあらざりや、而して此多情なる人間世界に於て、其情も厚く其愛も強き潔白ある二人の男女が、清淨ある二つの心を合せて一靈となり、無垢ある二つの身を合して一体となるは最も豈人生無上の快樂にあらざりや、是を豈高尚優美の絶頂にあらざりや。

蓋し夫婦の道は愛にあり、愛は男女兩性互に高尚絶美の情を通じ、情の鐵鎖を以て兩々の心を堅く結び付くるにあり、切言とせば二者の靈魂を一致せしむるにあり、然るも世人の多く之を誤解去夫婦の大道を以て肉交のひとなし、彼等自身も亦た神聖の愛、神聖の戀の存在とることを悟らざり、苟くも會へば禽獸の如く直ちに肉慾を走りて、美妙なる靈の樂を求むる能はず、尋ふべき道の靈躰を擧げて、實に言ふに忍びざる下賤の器となすに至るもの、滔々皆然らざるをよし、豈浩嘆に堪へんや。

夫を神聖の愛、神聖の戀あるものは、男女の情を相通じ、夫婦の心を相結び、二者の身を合せて一体となし、二

者の魂を合せて一靈とあすにあり、而して之を爲さんには男女互に相擇ひ、天の結び合せを蒙りたる後に結婚の大禮を行はざるべからず、然るに世人往々年少血氣の情に任せ男女互に其容貌の美に心酔ふ、深く其性質の善悪意氣の合否を究むる所なく、一見直ちに借老全穴の約を結び、遂には才子愚婦と配し、佳人惰夫に伴はる、に至る、而して這般の配偶たる、其初めは意氣相投し、和親互に愛するも、暫時よして琴瑟相和する能はと、葛藤忽ち起り、竟には夫婦の道を破りて不倫の行を爲し、離婚の己むを得ざるに至るなり、悲むべき哉嗟呼。

思ふに夫婦の道は神聖なる情愛に在り、決して彼の單純なる肉愛のみにあらざるなり、蓋し情交より生ずる愛は尙ほ松柏の緑なる如きか、絶へて美花を着けんと雖も、四時其色を改めざるあり、而して肉交より生ずる愛は、尙ほ櫻花の紅なるか如きか、色美ありと雖も其花速に凋落するを免ざるなり、吾人は切に春野夫妻の結婚を祝ふて神聖ならまめんとを望む、所謂夫妻の愛を以て松柏の如く、永久其色を改めざらんを望むなり。

先づ春野子に告げん、卿にきて今日花子嬢と婚す、願くは此婚をして永久に神聖ならまめよ、花子は彼の粹も無粹も嗜分けたる、左褻の苦勞人米入、仇吉の如き粹もあつ、又「一双玉手千人枕。半點朱唇萬客嘗」的の佳人、須臾にきて六尺の男子を海鼠の如くあらまむる、夕霧、高尾の美もなく、而して又馬上薙刀を揮ひ、縋手能く雲霞の大敵を驚おしたる、巴、板額の力もなき、然りと雖も忍心剛質、温良淑雅、春野子の室とては琴瑟相調和すべく、後來の賢母としては家庭能く融諧すべきあり、然らば卿は詩人ミルトンが歌へる如く、花子嬢を以て卿の最美なるもの、卿の最終に發見せしもの、天より卿に賜りたる最善のもの、永遠に新なる一導の光明となさざるべからざるなり。

次に花子嬢に告げん、卿にして今日春野子に嫁と、願くは此嫁をきて永久に神聖ならまめよ、縁は彼の花柳の巷を横行ふ、朝に芍薬を手折り、夕に牡丹を愛し、色情哲學の博士たる、權八、丹次郎の粹もあつ、花の顔せ、雪の肌、匂ひ亂る、美少年と今の世迄も歌はる、業平、宗次の美もなく、而して又勇武絶倫、鬼神を恐る、刀を揮つて戰場に立つときは、百万の敵中に泰然自若として、天地をも蹴破せんと志たる、辨慶、清正の勇もなき、然りと雖も錦心繡腸、志氣高尚にきて胸宇快潤、嬢の愛人とて百年の身を托し、苦樂を共にすべきの好丈夫なり、去きは卿は春野子を以て、卿の最尊のもの、卿の最敬のもの、卿の最も力となすもの、卿の最終に天より賜はるる最善のもの、卿の永遠に新なる光明となさざるべからざるなり。

説き終りて春野新夫妻を顧みれば互に深く感動しる處あるか如き。

澁かるかしらねと柿の初ちさきり 千代

吾亡弟ヲ憶フ

余は幾度か彼の清き紀念を存さん爲めに、筆を染めんと欲せども、思ひ出を涙の雨に遮らとて、情溢る腕鈍り遂に今日迄果さざりき、余の信せ、余が世路の辛酸を感せし以來、余に集まる總ての悲痛、總ての愛悼の中、其最も悲痛、其最も哀悼は禁へざりしものは、實は吾が弟の死なりしことを。

鳥翔け兎走り、歲月は水の如く流るぬ、余が一打の電音に驚かさき、悲痛の情に胸迫り、吾が愛弟久の死を吊はんが爲め、第二の故郷なる花の都を出立して、歸省の途に若きときは實に七年の昔なりけり、余が今渠の如何よ

英敏にして可憐ありしかを説かば、人は必き余の言したるを笑はん、良し余は言たり、渠を追懐するの情に於ては、余は甘んじて其非難を諾せんのみ、余が想像せる渠の容貌、余が敬服せる渠の美德と、是を半余の情の夢あるへま、然るをも余は想ふ、英敏の幼兒は短命なりとの金言と、能く吾が亡弟の身上に恰當することと。

乞ふ余が渠の性行を記するに當り、骨肉の情を驅らきて、筆自ら鈍るゐるを咎むる勿れ、余の敢て言ふ渠は其兄を慰むるに総ての熱心を以てし、曾て一度も疲れたるの色なかりまことを、余も亦彼に對して一度も邪念を懐みしことなく、彼と會て不快の感を起せしことなきを、噫今も去て之を想へば、彼が靜肅なる態度、豊厚なる顔貌、清涼ある眼、濃秀なる眉、和きて力ある音聲は、直ち吾が亡弟の容姿を造りて、余が眼前に現はせまめ、余を去て追懐の念を禁へざらむ、嗚呼此可憐なる一塊肉は、今は唯一片紀念の幻影たるに過ぎざるか。

彼の誕生は明治十三年の秋に於て、吾が祖父の歿したる次の年なりき、彼は其兄の誕生後尙一人の男子を望みたる、吾が一家渴望の中を生きてゐるを以て誠一家の玉とて輝けり、彼の笑顔と片言とは、親子六人の一家の時ならぬ春を興へ、余は殊も朝夕無上の怡樂を迎へたりき、日は経ちぬ、彼が初織りの節句は、一家談笑嬉語の中に過ぎぬ、彼は此頃より能く人語を解き、廻らぬ舌も能く語きり。

彼は其后年を拾ふ毎に、近家の妻女が吾が父母に賞譽せま如く、談話遊戯其他の動作も於て、通常の兒童と大に異なる處ありき、殊も少くも學びて多くを知り、多く興へて少くも取り、寡なく言ひて多くを行ひ、深く思ふて淺く語りまは、殆んど其天性も出でぬ、彼は又強く自然を愛せ、景色を樂むこと恰も歌人吟客の如く、草深き原

野、露滋き田園、明かなる空、清かなる水、明かなる月、青々たる山を愛せり、彼れは全年輩の兒童が獨樂を打ち紙菴を飛ばして遊ぶ間に、樹間の鳥緑野の獸を愛せ、花卉草木を採ねて、寂寥たる丘陵をたどることを樂みたり、噫實に彼れは自然の兒なりまあり。

余が學問の趣味を探り、登龍の門を攀ぢんか爲めに、埋骨青山を吟きて家郷を辭去、笈を負ふて東都に上りたるの後、彼は獨り自然を友とて無聊を遣きり、氣麗かなる春の晨は、鶯歌ふ林間の幽邃を訪ひ、微かに響く晚鐘を聞きて歸り、爽快ある夏の夕は、樅樹林の蔭を尋ねて蟬聲に耳を傾け、天高く氣澄み萬象沈む秋の日は、妻戀ふて鳴く牡鹿の聲に情を寄せ、陰雲天を封きて六花亂る、冬の日は、寒風水の如き窓を排きて、白皚々たる雪景に對またりま。

一年に一度の余の歸省は、如何に彼れに取りて嬉まきことなりしよ、又如何に余は取りて樂まきことありまよ、人々か流る、如き歳月に對て無常を嘲つ間に、余は獨り夏季休業の到るを待ちま、ソハ彼れか三度の食を忘るて好む處の錦繪を携へ歸りて、彼れが笑顔は購はんか爲めにてありま、彼れは亦も勿々たる兎鳥に對て、鶴首を去て其歩の遅々たるを嘆せり、ソハ余が夏の糧として常も其美味を賞せま處の、桃の果の培養を誇らんが爲めにてありま、而して余が兄弟八人の中、其半数は既に無常の風を誘わきて、落花と共に散り失せまれば、今の唯僅かに彼れのみ一人の弟とありぬ、去れば余の愛情は殆んど総て彼一人に傾きぬ、余は時と疢癢を任せて一時は彼れを叱ることあるも、彼れの可憐ある謝辭と無邪氣ある容姿とは直ち余の心を和らけ、余を去て却て自身の性急を愧ぢまめぬ。

余が石炭と鐵との怪物に運ばれて郷を歸るの日は、必き先づ曉色筑波の一角より開き。旭光山嶺を抹きて群雀囀るの頃、彼れと手を携えて舊城址に到り丘上の綠草を坐まつ、四方の景色を賞え、依然たる山河を對みて東都の繁昌を語りつ、歎を極めて歸りぬ、而して夕陽西山の影を歿し、暮色蒼然、晚雨筑波の山麓を草むる頃、再び彼と手を携えて五行河畔の晩歩を試み、日入りて天地青く四方の山相合えて黒塊となり、鷄鳴起り、鐘聲響き萬象次第に沈むの時、靜かに橋上より立ちて一碧鏡の如き河水を對み、共に吾家の歴史を繰り返さ、共に家運の隆昌を祈り、山を蹴りて昇る玉兔を眺め、冷かなる月光を踏んで歸るを例とせり。

故山の風色は蓋々余を取りては、天國の樂園にてありまあり、去れば余は都を去るの日、東臺の花を賞え、黒堤を露を拂ひ、龜井戸を梅を探り、團子坂を菊を愛する時は常として、尙や暮人所れもの之故山の山水風色を去て、尙や遊情を分たんと欲せまものと吾、が最愛の弟ありき、此情此念は、雨の夜、風の晨、常々余が腦裡を離る、と亦かまななど。

奔るか如き歲月の間は吾愛弟は、兩親の慈愛と余か友愛とによきて、幸福の家庭に生長せ、今も小學尋常科を終り、學問の興味と彼れを去て兒童の遊戯を忘さめぬ、彼れが毎夜深夜更人靜なるの後、更らも燭を挑げて讀書するの一事と、屢々兩親を去て其健康を害するを愛へまめ、彼れが夜半卒然を蹴りて起ち、床上に端座して學問上達を神に祈ることあるは、屢々清らかなる家人の夢を驚かまななど。

明治廿二年の晩秋、悲風颯々蕭殺の氣、人を去て人生の無常を歎せまむるの頃、家郷の嚴父より最も悲むべき飛報に接せり、「弟は十數日前より病を罹り既に危き」と余は惶惶馳せて上野に到り、僅かに身を列車の中に投せし

時と、余か満身の血液は頭上より集り、余か胸中よりは幾段の情波を漂はしり、虹を吐き雲を衝きて走る鐵車は、余が其進行の速さを恨みつ、ゆる間も、早くも余を運んで家郷に到着せり、此時余は只恍惚として幻光夢裡の精神的半死人ありき。

余の疾驅きて家門に入るや、父母を始め親籍故舊は已に冷かなる夢を結んで靜かに永き眠に入れる、愛弟の枕上を圍んで共に慟哭せり、余は其濃翠の眉、眠れる慈眼、莞爾として物言とんとする口を細視まつ、悄然と去て泣けり、涙に咽びつ、語り給へる母上の言によきば、彼れは十數日前定期試験に際し、刻苦精勵、夜を徹して讀書し、業成るの即夜流行の悪疫を罹りて靜に就けり、當初は左程に危らざりまも熱は次第に騰上り來り、然れども精神は毫も錯亂する處かかりし、其後病勢稍々衰へ、苦痛大に減きて食欲僅かに進みしが、是を只燈火の滅せんとするとき、一度其明を加ふるに過ぎざりき、越えて數日病勢俄かに激え、再び危篤に迫まれり、十月十九日拂曉父母看護きて枕頭に在り、弟は自ら其臨終の近つけるを察し、僅かに憔悴の雙手を擧げ、父を呼び合掌して厚く既往の恩を謝し、次に母を呼びて靜か身を重んず永生の道に歩すべきことを勧め、尙や語を續けて余に遺さんと欲せまも、咽喉濡れ口熱ま舌澁り聲涸れ、氣息漸く細く、西の山の端より傾く月の光り誘はきて、彼れは竟も黄泉の旅路に上り、而して此際の片言と、彼れが再び繰返すべからざる最終の一言とあり、此世に於て彼れの音聲を再び聴くべからざる、一片の名残とこそを爲り果てたりと。

彼れの臨終の際迄其傍らに侍し、余も代りて看護に従事し、少なき胸を苦めたりし吾姉上は語りき、「歿する數日前彼れは頻り余の歸省の何故か遅きを責せり、彼れと病床を臥の間も、一日も世界に於ける唯一の兄なる

余に對して、其濃かなる友情を盡すことを忘るざりき、彼もが時と流るる苦き水薬を服せざるを肯せざりしときには何時も之を余の贈物として勸めたりしに、彼れは苦味を忘る喜んで服せり、彼亦た歿する前夜、姉上を呼び如何なるとをか遺したりしが姉は只悲哀の情を撲たきて、明かに其遺言を聞き取り難かりき、而して唯儘に彼が最期に迫まざる衰へし氣息より、冷なる一滴の涙を以て、姉の膝に渡りたるを記憶せり」と語り了りて血涙雨の如く余に身を投げて泣けり、是迄泣かざり忍びし吾も廣き世界に唯姉一人の如く覺へて共に泣けり。

此時余は悲哀胸に迫り、何となく死に度くきり余が此際之苦痛は、百の苦惱、千の煩悶を以て説き明とも、到底之を説明する能はざるなり、余は當時鐵槌を以て頭腦を打たせ、利刀を以て心臓を刺さるる心知せり、萬斛の血涙を呑んで、慰籍なき絶望の深谷に陥落せり、嗚呼此瞬間、余が頭腦も刻さるる悲痛の記憶は、今后如何なる幸福の境に立つも如何なる満足の地位に上るも、余が生命を辭せざる限りは、到底之を記憶より取除くこと能はざるなり。

越へて一日吾家人並に、吾家の親籍故舊は、佛葬の式を行はんが爲めに、彼等の英靈を宿せる質素なる柩を擁し從來の舊き棲家より閑静にまて新たなる棲處の光徳寺に送き、柩は廣かなる本堂の、尊き彌陀の前に安置せたり、佛燈は微かに點せらるる、讀經の聲は寂々として響けり、燈光影青く古龕を照らす處、陰然として如來の尊像立ち、冥々たる香爐の烟は、縷の如く灰色の文家を描きつ、柩の前後を繞り、巧み欄間に彫らるる慈をかなせ、簫を吹き鞀鼓を打つ天女、美しくしき金輪の量を背にして立てる彌陀如來も、香爐を築げし獅子も、寶簡を噛みたる鳳凰も、皆悉く悄然として涙を垂れ、彼れの長き眼を惜むが如く、寺外人少なくて天地寂寥たり、余は

此時尤も恍惚として夢の如く、渠が柩を出で來りて、今一度其眼を開き、其唇を揺らすことなきや否やを疑ひたり、嗚呼余は今に於て細かに其哀悼、悲痛を描き、再び當時の感慨を切からまむるに忍びんや。

讀經了り、焼香畢り、木魚鳴り、梵鐘響き、柩は埋葬地にと運ばるる、凄風恨を吹きて悲雨淋瀝を滅し、枯枝を吹き鳴らす木枯、梢頭を繞る半痕の月は、無限の悲哀を會葬者に送り、無窮の恨を鎖し畢んぬ。

嗚呼人生既に生あり、焉ぞ亦た死あかるべんや、人生既に喜あがり、焉ぞ亦た悲なからんや、人生は兩邊あり、錯て一を生と稱し、錯て一を死と號す、生は死の表門にして、死は生の裏門なり、猛き人も竟には亡び、壽なる人も何時かは死なん、何ぞ獨り弟の短命のみを悲むべんや、然るも余は尙ほ天に憾あり、其死すべきの人に壽を假し、死すべからざる人の命を奪ふと、彼の浮雲の明月を蔽ひ、狂風の麗花を散らすに似たるは、是れ果して是乎非乎、余は疑ひるる能はざるあり。

嗚呼渠は生前父母に事へて孝に、兄に事へて悌なりし外は何事も爲すことなかりき、然れども其爲さんとせし志望の大ありしは、余が今日尙ほ敬服する処なり、渠は平生勤めて其學才と氣概とを收藏し、以て禍災を戒めたり然れども物に觸れ事に接すば、直に其鋒芒を露はして屢々人を驚かせり、渠は平生内氣性にて容姿柔和婦人の如く、稠人廣坐の間にあては、屏息低頭、默然として其談論を傾聴するを例とせり、然るも其大度にして沈勇ある、八歳の時既に一人夜行を試みて、數々家人を驚かしたりき、渠は又偽を以て無上の罪惡となし、詐る人を以て唯一の魔神となせり、故に生前一點も偽り詐ることなき、此氣高くして健全に、清淨無垢ある品性

は渠の知人に信且つ愛を買ひ得たる所以なり。

明治廿八年十月十八日、人は秋風辭を吟きて無常を啣ち、合掌せる蓮花、低泣せる桔梗は、雨に撲たれて自ら萎む頃、余は行李を理めて歸省の途に上り、家に残る唯一の姉上と共に、香花を携へ、光徳寺畔、渠が静かに横はる眠宮を訪れたり、苔滑かる三尺の墓碣は、彼が安全に眠る宮殿にして、苔蒸せる祖先の墓碣と相並んで建てらるぬ、墓地を過りて植らるる杉樹は、蔚鬱として凄陰を罩め、枝を洩きて射る日光は淋しげに、其微光を送りて、四邊自ら寂寥たり、數日前母上の手自ら捧げ給ひし、一束の桔梗女郎花は、今は悲風慘雨に洗はきて萎み仆きつ、更らに凄涼の氣を加へたり、風は打たき雨に拂はきつ、も、尙ほ明かに彫られたる「涼羅童子」の四文字は、歴如として墓碣の面に存せり、余は曾て筆を揮ひたる吾が悪文字の、斯く迄立派に彫らるるとは想はざりき。

余は離々たる秋草の墓前に咲き亂れたるを掃き清め、寺の阿伽桶に紫井戸の清水汲み來り、花筒に手向けつ、姉上より授けらるる蓮華を享け、跪きて墓前を奉し、無言の涙を漉ぎて冥目すれば、彼が生前の温容は髣髴として眼前を顯き、嫣然と去て余を慰むるが如し、冥寂の僻天地に余は一基の墓碣に面して、石像の如くに立ち茫然として心は蠟の如くに融けぬ。

既よみて日は西山に落ち、晚鴉暮林を歸り、鐘聲無常を告げ、四邊漸く黒幕を包まんとす、願きは新古の墓碣は累々として、宛然幽外國を爲し、貴賤上下の差なく、老幼男女の別なく、同じく一杯の土に歸し、唯人生の無

常を告げぬ、思ふ數百年の古より、其根を此土に埋めたる、彼の挺々たる長壽の老松は、我が短命なる弟久を護きて、今より幾百年の命數を保つならんか呼。

一炷清香一卷經。一輪明月一張琴。回首万象皆賓客。細嚼南山北斗樹。

送參事官松本郁郎君

余は君と膠膝の交わり、水魚の交わり、余は君と心を以て交れり、情を以て結べり、而かも奈何せん職責重く去て情縁を繋ぐの力なく、今君飄然宇陽を去り、將に任に阪地を赴かんとす。古人曰く「黯然離別既傷心」と余今や管鮑嘔心酒百杯の交わり、一霄情話、青燈を剔りて、共々時局の艱難を憂ひ、共々心靈の應合を樂みたる君と相別る、焉ぞ黯然と去て心を傷めざるを得んや。

然り雖も古人も言へるあり、丈夫涙なきは知らず、灑がす離別の間と、今后關山一百里、茫漫たる雲煙を隔て、朝夕追隨する能はされはとて、何ぞ必しも深く悲むも足らんや、男子の期する所は只蓬桑、區々たる心情を以て婦女子の態を學ぶが如きゆらは、却て君の一笑を煩はすに至らんか、况んや今回の轉任たる君に於ては輩る大なる榮譽に去て、浪花の地たる道路入達、街衢廣闊、商業の中心市場と去て、華美を競ひ繁榮を事とし、殷富一世に冠たる麗都なきは、君が識度才略遠く俗流を秀で、八面玲瓏、手に觸きて春を成すの技倆を試むべき。繁根錯節の地たるよ於てをや。

君の精神を知るものは余よ去て、余の精神を知るものは君なり、君は温厚篤實古の君子の風あり、常に謙讓して

人と短長を争はず、人と異同を較せず、人と物慾を競はず、窓下静かに書を繕きて千古の偉人と語り風月を友と
まて名利を忘る、而かも此間常に思を家國の隆興に馳せ、忠君愛國の情眉宇の間に溢き、冷静なる頭腦、温なる
心情吾人を去て轉た故郷の念も堪わざらまむ。

余の嘗て單身筆を戴せて宇陽の地に入るや、所謂「獨在異郷爲客」もの固より知己多からず、而して君が扶持勝
掖によりて得る處誠に少しどせざるあり、余屢々君を塙田の官舎に訪ひ、臂を把り膝を交へて、共に天下の大勢
を論ま、共に古今の英雄を罵倒ま、高尚ある哲理を談ま、活氣ある歴史を語り、時は、余は常に人間寧ろ這般の
快心事やらんやと思へり、而して今回君は余を捨て、阪地に入らんとす、重ねて相見ざるを得る果まて何日の日ぞ、
今后花開き花落つるの日、月圓く月缺くるの夜、屋梁の落月啼鳥を聞くの時、余亦誰まど共に樂まんや、之を
思へは九腸寸断、涙潸然とまて下らざるを得ざるなり。

今や我國、外は臺灣の匪徒、頑強にまて王化は滯はず、内は戦後の財政紛然として亂る、政海の波浪澎湃として
岸を嘯む、是を豈東海の水を傾け來りて、沛然乾坤を一洗すべきの時非ずや、噫功名の門は開けたり、君が其
識見と、其技倆と、其雅懷と、其學術とを試むべき時は來まり、君夫ま之を放り、然りと雖も秋炎烈日、虎軍
尙は威を振ふ、邦家の爲め乞ふ自愛せよ。

明治廿八年九月十三日

漢恩自淺胡自深。 人生樂在相知心。

王荆公

桑嶋 齋造 君 ナ吊フ

嗚呼絶大の恨事、天は我親友桑嶋齋造君を奪ぬぬ。

君は東京の人まて徳川氏の舊臣あり、夙に東京専門學校に入りて政治學を修め傍ら、學の友雜誌を執筆し后ち
名古屋の扶桑新聞を主筆しり。

君人となり短軀厚頰、巨眼厚唇、風姿清爽、威儀堂々容貌既に其血性男子たるを顯はせり、而まて沈着態度喜怒
色も顯はさず、其言論を穿ふまて所信を斷行するの点ま於ては、常に濟輩を越へ、其執着耐久亦ま儔を稀ます、
是れ蓋し君が一度逝ひて、友人の間ま強く哀悼せらる、所以なり。

若ま夫れ余を去て君の性狀の一斑を擧げまめんか、君は潔癖の性あること古の屈原の風あり、世を擧げて泥濁ま
まて君獨り清めり、衆人皆醉ふて君獨り醒めしり、正を踏み直を求めて俗ま入れられず、世を慨ま俗を憤ま、僅
らま悲憤を文書の上ま遺る、世俗を痛罵まする渾沌世界の著は、是れ蓋ま君が熱血の餘滴あり。

君の精神を知るものと余まして、余の精神を知るもの君あり、曾て芙蓉俱樂部なる青年の團體を組織して、辨
論界ま遠征を試みんと欲ましりま、此間ま於ける書生的生活の味、余が終身忘る、能はざる處なま、其ま燒芋
を食ひ其ま沙豆を嗜み、忽ち天下の大勢を論ま、忽ち古今の英雄を叱咤ま、一杯の澁茶ま舌を舐ま、一杯の前餅
に飢を凌ぎ、爐火の灰とま、寒威の扇を襲ふを忘れて、終夜古戦まると其幾回あるを知らざらま。

幾許もかく君は聘せられて名古屋の扶桑新聞を赴き、余は都門を去まて故山は起臥するま至り、相見ざるま殆ん
ま二歳、此間相慕ふ情の切なる余も夢ま幾回か君の清澁を叩けり、今春一月余が郷里の青年を集めて機關雜誌を

發兌せんと奔走まつ、ある時、君之病を養ふんが爲り、歸京せり、聞わらば出京せよとの友情深き書を送り來れり、親友の雁信に接し余は旅裝匆匆上京し、君を牛込大久保余丁町の實家を訪へど、君の病は肋膜炎にまで既深く其膏肓に入りぬ、顔色蒼、白頬殺け眼窪み、肉瘠せ骨立ち、又昔日の奇矯蕩逸、一世を蹴弄せざるの威風あらず、嗚呼慘なる哉。

君は珍らしき舊友を會えて、強く其心情を刺衝せしむけし、兩眼に涙を含みて余を迎へ、互に手を握て別後の事を語り、深く余の訪問を喜びし、且つ君は自ら其病の到底愈むべからざるを知るもの、如く、死後の事を語り出で、余に處世の要道二三を告ぐ、言々喞々語辭切裂亦滔々たる昔日の能辨なま、余の死の手の既に君を捕へたるを知り、悲哀胸に迫り九腸寸断するを覺えまも、血涙り涙ある長談の病に害あるを知り涙を呑んで惜まき訣を分ちしるまが、是を誠に一生の永別なりき。

明治廿八年三月八日、君の父君より其悲むべき訃音に接す、嗟呼君之終に起たざるなり時に年二十三悲哉。

君は幼より深く世道人心の敗類を嘆き、之を矯正するを以て己れの任とあま、文章に演説に其挽回策を謀り兼て風粹の發揮を以て献身的の務めとなせり、然れども病魔之常に君が身邊を襲ひ、其半世をまて病瘳を離る、能はざらまむ、噫遺般の遺憾豈に獨り君のみありと言はんや。

嗚呼生者の死あるは天命ありと雖も、古來其才子佳人を奪ふの速かなるに至りては、寧ろ吾人をまて天道は是非乎を疑はまむ、浮雲明月を覆ひ狂風亂花を散らす、古來文人韻士の恨事とならば、况んや君の如き功未だ成らず名未だ遂げず、后来爲す有るの雄志を靡らま、空ま幽冥に向て去る者に至りては其悲むべからずや。

然りと雖も死者復た蘇くべからず、君の舊友君の徳風に垂ま君の遺志を繼げり、君以て快く瞑すへまなり。

江聲流恨無古今。 唯有青山不語高。

宋 壺 山

新聞紙ト新聞記者

第一、新聞紙の勢力及其責任

夫れ新聞紙と、文明世界の利器にまて社會の耳目あり、不言不視の活物にまて吾人の相談相手なり、社會公衆の口舌にまて億兆の演説場なり、多數人民の代理人にまて天下輿論の表明者なり、万民の權利を保護するの警官にまて、天下の惰民を撻破するの警鐘なり、暗黒なる政界を照らすの燈明臺にまて、不義の徒を摘發するの探偵人なり、狂瀾せる商海を航するの羅針盤にまて、不正の奸商を諷刺するの裁判官なり、故に苟も民權を擴張まて立憲の美を明らにま、人智を開發まて社會を進歩せまめ、字内の大勢を看破まて天下の趨勢を定めんと欲せば、先づ新聞紙を利用して、天下の趨勢を明らにするに若くまなま、於是乎近來新聞紙は天下の明鏡、社會の活歴史とまて、大に世間に貴重視せらるゝに至れり。

夫れ然り而まて新聞紙が、斯く社會公衆の間に新勢力を博するに至りまと全時に、其紙上に於ける評論批判の當否は、又大よ一世の風教に關係を及ぼすことなれり、何とみれば社會民衆は日々世上ま湧き出づる一切の天爲人事と、之を直觀せずまて、間接ま新聞紙を媒して之を通觀せればなり、故ま假令世界ま一大事變あるも、若ま新聞紙にして之を記載せざらん乎、社會の人民は之を知り得ざるま、若ま新聞紙ままて其事實を誤報せん乎、社

會の人民之之を確實なりと信じて疑はざるあり、若し新聞紙よきて其事實に相當の注意を與へざらん乎、社會の人民は又是れに相當の注意を與へざるなり。

社會民衆の新聞紙を信用せ、之を依頼せ之を貴重すると夫れ右の如し、故に苟も世の新聞紙なるもの、大と宇内の大勢より小の裏店の銷事に至る迄、社會万般の出來事を評論報導するに當りては、極めて公明正大の眼光と不偏不黨の識見とを以て之を評論せ、最も正確なる事實と、最も新粹なる事變とを擇んで之を報導せざるべからず若し夫れ新聞紙の評論する所、報導する出來事よきて、其正鵠確實を失はん乎、其害毒の及ぶ所決まて甚るまじきざるなり、或は天下の民心之が爲めは動搖せ、一國の經濟之が爲めは攪亂せ、國家の輿論之が爲めは變動するに至り、亂臣賊子其虛を乘きて暴威を逞うするに至ると、古來其歴史よ乏乏からざるあり、是れ即ち新聞紙が其責任を重んぜざるべからざる所以よきて、新聞紙の眞價亦た實に茲に存す。

新聞紙の責任は何れの世、何れの時よ於ても大なり、然れども吾人は今日よ當りて、一層其重きを加へざるを思ふなり、何とあれは今日は維新よ漸く地球上一大強國を加へ、世界の眼光は一集せ、政權商勢の新要素又突乎とて現出せざるを覺ゆればなり、換言すれば、征清の大義舉は我國民を去て、自ら大國民なるを自覺せよ、世界の列國をして東洋よ於て清國以外よ、義俠勇武ある大日本國形るを認識せしむるに至りよれば、今后吾人の一舉手一投足は、直ちよ其波動を全世界よ及ぼすべく、世界列國の民衆は我新聞紙を透して、我國狀を通觀すべきか故、今后新聞紙の責任は地球と重く、世界と大なるに至りよればなり。

征清の舉は斯く新聞紙の責任を大ならせしめしと同時に、更らよ之よ向つて幾多の論をべき好問題と、報すべき好

材料とを與へたり、之を以て新聞事業の頻繁なる、未だ曾て今日の如きは是れあらざるあり、然れども近時續々發兌せらる、新聞紙の多くは、其讀者を増加するに從て益々其品位を墜落し、企業者の競争愈々行はる、に從て愈々其責任を輕んぜ、眞に天下の明鏡、社會の耳目たる本分を確守するものに至りては、誠に寒々曉天の星と斷きて不可なきの有様なり。

乞ふ試みに彼の政黨の機關新聞あるものを取りて一覽せよ、其政黨を攻撃するの毒筆と、紛々として全紙面に溢れ白を黒とし有を無とし、苟も以て敵黨を害すべく、以て自黨を利すべき事柄は、極力論議報導して遣さ、ものあざる乎、企業者と競争の結果として、新奇の報導をなして只管其紙数を増加せんと考より、殊更二号活字を用ひて、或は根據なき偽電を載し、或は投機者の流傳たる憶説を傳へ、或は推測を以て虛事を捏造し、號外を配付して、衆人を驚殺するの新聞紙はあざる乎、敵黨の人物を中傷するの目的を以て、天下の名士を目して盜賊亂臣、賣國奴と呼び、其惡口車夫、馬丁と雖も及ぶなきの新聞紙はあざる乎、否吾人は往々にて是れあるを認むるなり。

若し夫れ新聞紙を以て、一片の反古扇とみれば即ち可あり、然れども實際今日の新聞紙は、其町村の間に入りては、實に一個の施政者あり、一個の教師あり、一個の感化者なり、町村の人民は之を良師として、之を益友とし、之を相談相手とせ、余輩と恐る斯かる新聞の曲筆と、惡徳の文字とか、一度町村人民の學ぶ所となるに於ては、文明政治を新たに導きたる、地方自治体の政治機關上に如何ある害毒を及ぼさ、町村人民の之が爲めに受くべき不幸損害は如何に大に、而して我社會の道德之が爲めに如何ある感化を受けて、如何ある慘狀に陥るべき乎を、

之を思ひ彼を想へば、吾人は轉た痛嘆に堪へざるなり。

畢竟するに新聞紙が、此くの如く其品位を下落し、其本分を誤るに至る所以のものは、固より諸種の原因ありて然るべしと雖も、是れ蓋々新聞紙夫れ自身の罪にわらず、其根源は一に新聞記者其人の當を得ざるに依る、於是乎新聞記者の責任問題起る。

第二新聞記者の勢力及責任

新聞記者の地位は重く其責任と大なり、新聞記者は布衣の宰相なり、五寸の管城子、一揮万言を連らねて、巧に天下の實勢を論議し、社會の情況を直寫す、以て人心の嚮ふ所を指導し、以て國是の據る所を明定し、事物の善惡是非を批判す、其關する所至大至重に於て實に天下の施政者なり、社會の代議士なり、輿論の表明者なり、則ち一言にして國を興衰、一言にして、國を亡ぼし、社會全般に向つて精神的に生殺與奪の權を有するものは、是れ實に新聞記者に於らずや、西人の諺に「大臣は行ひ記者は言ふ」と唱ふる亦た宜なり。

新聞記者の地位夫れ此の如く重し、是れ其責任の從て大なる所以あり、然り彼れは幾多の職分を有す、蓋し彼れも亦た一種の勞働者なり、彼は一枝の筆を揮て文を草し句を連ね、目を飛ばし耳を長うし、大は世界の大勢より小は裏店の喧嘩に到る迄、大と一國の興廢存亡より、小と町村吏員の更迭に到る迄、大と國家の經濟事情より、小は一商店の破産倒財に到る迄、朝と夕とを論せず、晝と夜とを問はず、之を看破し之を聽聞し、以て各種の材料を蒐集せざるべからず、若夫れ一枝の筆を載せて軍事通信に従事す、身自ら寒苦を闘ひて一軍の寒苦を通信し、彈丸雨飛の間を突進して將士の勇往敢進を通信す、或は挺身斥候隊の中に隨伴して敵狀を偵察し、或は抛命

水電艇に附乘して敵海に潜入し、一刻不幸に於て敵彈を蒙り、將官と共に陣歿するものあるが如きは、是れ實に職務の爲めに死を顧みざるものにして、必ずしも彼の將士が攻城野戰の勳功に讓らざるなり、新聞記者の職任豈夫れ大ならずとせんや。

新聞記者の任重きと右の如し、然れども世人の多くは尙之を噴々攻撃して止まず、文壇の老將櫻痴居士曾て新聞記者の境遇を嘆きて曰く「新聞編輯は任ざる恰も湯屋の三助に於けるが如し、熱くすれば湯湯好の客に叱せられ、温くすれば熱湯好の客に小言を喰ふに全玄く、鄙俗に過ぐれば上流に笑はれ、高尚を失すれば下流に厭はれ、其拙加減の六ヶ敷には料理人も辟易なり」と、新聞記者の境遇寫し得て遺憾ありと云ふべし、又近年銀貨下落の大勢と共に著しく、其品位を失墜せざるものは、新聞記者も若くものはあらざる、聞く近縣の或新聞記者として、某の家に縁談を申込たりしに、先方の答には、「若し新聞記者を御止みされば何時にても拙者の娘差上可申候」と、是れ誠に一小鎖事に屬すと雖も、亦た以て新聞記者の品位を知るに足るべき、是れ蓋し社會民衆が、新聞記者を遇する所以の道を知らざるに坐すと雖も、畢竟記者自身が自ら求めて、其品位を失墜するの舉多きに居るや必せり。

新聞記者が其品位を失墜せざる原因を悉く數ふれば頗る多し、然れども其原因中に就き更らに其根源を求めば彼等の中腐腸軟骨、卑屈輕薄者流の多きと是れなり、我國の新聞記者中には、彼の黃白の爲めに節を屈せ、虚事を構造して反對黨を中傷せんとするものなき乎、劣るに權門に出入せ、狡黠不義の手段によりて、其名聲を博せんとするものなき乎、姦商より賄賂を貪りて其提灯持を爲さんとするものはなき乎、筆戰酣るに及んで語窮ま言屈

すれば、忽ち反對者を呼ぶに亂臣、賊子、賣國奴、詐欺師、盜賊、馬鹿、鼠輩等のあらゆる悪文字を羅列して、罵詈雑言を至らざるものなき乎、苟くも己れに不利なるならば、曲筆以て之を蔽ひ、敵に不利あるならば細大遺さず、信偽を辨せしむるに甚だしきと無と有とまで特筆するものなき乎、吾人は往々に去て是れを知るを認むるなり、而去て斯かる事實は、多く政黨の機關新聞に之を發見せ、是れ職とまで彼等新聞記者が、「雜報は神聖あり」テウ、新聞哲學の原則を知らざるの罪に坐するのみ。

夫れ新聞記者は通信の奴隷にわらず、苟くも通信なきば其虚説あると、其捏造あると、其捏造あると、誠信なるを問はず、悉く掲載せざるべからざるの理なき、新聞記者は所屬政黨の牛馬にほらす、全紙を擧げて政黨の機關に供せずまで可あり、彼と議論の上から自由意志を有す、其天下の事を議せ、其天下の人物を上下するは記者心意の自由なり、自己が信ずる所の主義に従ひ、自己が崇拜する所の人物を賞賛する固より良き、然るも事實の信偽有無に到りては、是を實際の現象あり、彼等は只有の儘に之を報導せ得べきのみ、自己の意志を以て之を左右とべからず、故に新聞記者が其自由意志を發表すべきは、全く論說の一欄に止まり其雜報欄に及ぶべからず、然るも當今彼等の多く、此區別を混全まで漫然筆を遣るもの比々皆然り、是を即ち新聞記者が自ら求めて其品位を失墜する所以なり、豈痛嘆に堪ゆべけんや。

朝ごとく洗ふとすきと積るらん身の塵ばかりいかに清めん 爲家

江木新知事ニ寄語ス

余輩は固より深く足下の手腕を識るものに非ずと雖も、零々其從來の履歴に徴して、其一端を窺得たり、足下は法學者あり、教育家あり、而して長州の出身あり、從て足下の中央政府に於ける生涯は、教育家の生涯あり、法律家の生涯あり、其文部にあてては普通學務局長として、其内務に在りては、縣治局長として、嶄然頭角を顯はし、能く論議能く議し、在朝少壯政治家中の敏腕家を以て稱せられたるは、人の能く知る所あり。

然りと雖も民心は法律の外に動くものあり、人心は教育の環外に逸するものなり、幾多の縣治者、教育家を一堂に集め、法規を是非し章條を論議すると、一縣の知事とあてて民心を收攬せ、風化を教導し、黎民を撫育し、殖産興業を獎勵するとは、頗る其趣を異にするものあるを、漫りに法理を應用し、万事万端、法律の理窟攻めとなし、縣治の經綸を強て法規の模倣中に投入し去るわらは、縣民は却て其器局の小量を厭忌するに至らんのみ、而して現政府が特に足下を擢拔して、難治の名ある本縣に知事たらめたるは、蓋し足下が深く縣治の消長に留意し、寛量能く人を容れ、洪度能く事を處し、民に長たるの識度才器遠く俗流に秀て、八面玲瓏、手に觸れて春を成すの技倆あるに由る乎。

由來本縣は全國中の難縣を以て稱せられ、知事交迭の頻繁なる、他に多く其類例を見ざるあり、而して其中には稀れに良二千石とまで、能く事業に成功し、縣民の仰望尊信を受けたるものなきにほらざる雖も、概して縣治上に失敗せ、一成效の見るべきなく、或は不信認を擬せられ、或は縣民に冷遇せられ、鬱々として其任を去りたるもの多きは、余輩が常に縣民と共に其不幸を悲む所なり、看よ本縣に知事たゞし十餘名中其、職責の重きに堪へ

すして他に轉せられ、若くは其職を辭せたるもの如何に多きかを、彼の關、野村兩知事の如きは良二千石の名を
 きに知らず、人見、安田兩知事の如きは能く事を企て、能く失敗せたりと雖も、其縣治に熱心にして、成功せし
 事業亦尠みならず、嶋、牧野兩知事に至りては、知事中の最も敏腕家を以て稱せられたるも、在任期極めて僅に
 まて其技倆を試むるの餘地あかりしが如く、無爲にまて而て終る、其中山、石井並に高崎舊知事の如きは平々
 凡々、無爲無聲にまて一も成效せざ處なく、早くも他に轉せらる、嗟呼從來本縣に尹令の印授を擔ひたるもの、
 其効蹟の一も見るべきなくして交迭頻に到る、縣治の方針何に由りて確定し、縣民の幸福何に由りて完結すると
 を得べきぞ、之れを思ひ彼れを考ぬれば余輩は百万の縣民と共に轉た憂愁に堪へざるなり。

蓋し江木君足下は多年縣治局に長として、全國の縣治に察し各縣の事情に通ずる以上は、固より我が縣治の難易
 我が縣情の煩簡に就きて一夙に知了する處あるべく、縣治に於ける成算之既に充分成立したるなるべきを、果して
 然らば今後如何にまて或縣政を料理せ、如何なる方針を擇んで縣治の完成を期せんと欲するか、是れ余輩が縣下
 百万の人士と共に、張睨明目して切に知らんと欲する處のものあり。

時局多難にまて良率を想ぬ、非常の時には非常の事を斷行せざるべからず、非常の事を行ぬには非常の人物を要
 するを、今や我國獨力以て東洋の老大國を征服し、雄名四海に轟き、威武世界に懸れんと雖も、藩閥政府と
 尙や依然とまて政柄を握り、責任内閣の實未だ舉らず、怪霧昏々として憲章其光を失ひ、陰雲晦暈とまて濁浪天
 を捲き、立法議會は蛙鳴雀噪の場となり、人民の宿望一も貫徹せざ處あるを、是れ豈非常の人物出て、東海の水を
 傾け來りて、乾坤を一洗すへきの時期にあらざるや。

且は夫れ退きて本縣を見るに、實業振興の策と言へ、教育獎勵の法と言へ、風紀警察の肅振と言へ、監獄制度の
 改良と言へ、收稅署吏の革弊と言へ、非常の人物を待ちて而て後は斷行せらるべきもの、一にまて足らざるな
 り、噫此非常の時に處て誰れか能く其大任に當るものぞ。

思ふに時局多難なる今日に際し、難治の稱ある本縣に知事となり、諸般の情弊を刷新せんと欲す、焉を小才子、
 小權謀家、小策士の能くする處ならんや、焉を器局小量、薄徳微才なる群小政治家の能くする所ならんや、而
 て政府の特に足下を擇んで、此繁根錯節の地に技倆を揮ひまめんと欲するもの、必ずや足下が機敏ある手腕、雄
 遠ある識見に待つ處多けれなり、江木新知事たるもの、豈無爲まて而して己むへけんや。

江木君足下、一縣の知事たるを以て小と爲す勿れ、尹令の職を以て小事ありと爲す勿れ、古へは縣令より一躍
 て宰相の位に登りたるものあるまならずや、尹令の職より登りて大臣の椅子を占めたるものあるに知らずや、又
 現る米のクリーブランド氏の如きは、少るるニューヨーク州の一知事より、進んで大統領の桂冠を著するに至り
 たりあらずや。

夫れ一縣一州を治むるは、天下を治むるの始めあり、昔は鄧禹光武と説て曰く、「明公英雄を延攬せ、務めて民心
 を悅ばすに如くはなき、高祖の業を立て、万民の命を救ひば、天下も定むるは足らざるあり」と果てて然りとせ
 り今足下が暫らく碧海鯨鯨の手を収め、而して地方は長官となり、惇林とまて温良に、重厚とまて篤實ある縣民
 を教化し、先導し感化を撫育するは、須らく先づ恪勤精刻、血と涙とを以て事と處せざるべからず、地方人民
 は至誠と知らずんば、將た赤心と知らずんば決して其治下は服するを肯せざるなり、若し夫れ足下とまて能く一

縣を統治せ、民心を延攬するあらば、天下も亦た定むるに足らざるあり。妄言多謝。

劔禾日當午。汗滴禾下土。誰知盤中食。粒々皆辛苦。

我郷ノ凱旋軍人ヲ迎フ

君看遼瀋無邊水。處々波濤起戰聲。客年晩夏の候、朝鮮問題一度破きて茲は日清戦争となり、日清戦争の茲は諸君を促きて、万里遠征の偉業に従ふと云ひるや、諸君は挺身報國の念勇ましくも、一命を鴻毛の輕さよ比ふ、君命を盤石の重さよ定め、威風凜凜、嚴霜烈日の如く、万里の波濤を蹴破きて、遼東半島に上陸せよ以來殆んど二百余日、世界環視の大舞臺に於て、頑味不羸なる豚兵を膺懲せ、克く帝國の威武を世界に發揚せ、皇國の義侠を宇内又宣傳せしめたま。

此間諸君が經過したる艱難辛苦と、吾人國民が誠に感謝し堪へざるもの有り、其百難を排きて屈せず、万險を冒して撓りまじ、變に臨んで助かざるを山嶽の如く、危ふ會きて恐るざるを海洋の如く、時よ或は淡々たる沙土を踏み、巍々たる山嶽を越へ、洋々たる急河を渡り、茫々たる平原を食なく糧盡き、沙を嚙んで偵察の効を了またるが如き、時に或は鵝毛霜々とまて降り、白花紛々として亂る、嚴寒の候、四望暈々たる北清の野に、夜三更宿すに家なく被るに衣なく、河は激き石に枕し、以て傳令の職責を完ぬるか如きは吾人「憶到征人艱難處。霜。半。夜。老。如。霜。」の感なくんばあらざるあり。

諸君が遠征の苦を忍びると實は此の如く而かも慘として驕らず、其連戰連勝、功名の頂上に達して謙恭自ら抑

ゆるが如きは、是れ豈天下の最大美德とあらざるや、是れ豈世界最美の軍人にあらずや。

諸君の中或は其名を將校の如く、永く青史に留むる能とざるもの有るへまと雖も、然と雖も言路を休めよ、「一將功成万骨枯」と、諸君が身命を賭けて國を護るの楯となせし精神は煥とまて千載の後に輝かんのみ、看よ帝國が今日大勝を收めたるは、一に諸君の力に是れ由ることを、噫諸君の成したる功は國功あり國の効をあたは功の最も光榮あるものなり、夫れ英雄の下には必ず無名の英雄あり、コロンウェルの下には鐵騎あり、徳川家康の下には三河武士あり、諸君は是れ無名の英雄なり吾人豈諸君か報國忠君の赤誠を等閑に附せんや、祖宗在天の威靈も亦應に、諸君の赤誠を照鑑とへきあり、諸君乞ふ之を諒せよ。

今夜不知河處宿。平沙万里絶人烟。

岑 參

我郷ノ青山白水

避暑の地、何處の邊にか之を定むへき、七寸の青鞋よ五寸の筆を載せ、或は北海の激浪を衝きて五稜廓の古戰場を吊ひ、石狩河畔にアイヌ民族の事情を探るも亦妙あらん、或は東海の鐵路により、古木亭々とまて豊尙暗き嵐山に登り、山高く水清き邊、風淡く玉兔古寺に啣る處、延尉の孤忠を追想して、青衫を絞るも極めて妙ならん或は金剛杖を振て不二の高根に攀ち、水晶を溶かしたる清泉に渴を癒し、山神と語りて浩然の氣を養ふも亦た最も妙ならん。

然り避暑の地、何れの邊にか之を尋ねて得ざらんや、然りと雖も余輩は茲は絶好の避暑地とまて、殊更我郷の青

山白水を紹介せんと欲す、是れ蓋し遊んで以て歴史的概念を養成すべく、將亦た以て愛郷的精神を發揮し得べまど信すれいなり。

我郷の山水は眞に是れ一幅の活圖畫あり、到處の山は峰嶽とまて青く、之を環るの水は漫々とまて緑あり、四季隨時の風光は、見て飽くことを知らざる閑雅幽邃の仙境を描き、人を以て心を自然の美と融合せしめ、無量の新智識を博得せしむるに足る、若し夫れ一笠孤筇白雲を追ひて流れに伴ひ、山岳を攀ぎて珍木奇草を拾ひ、河海の濱を跋渉去て白砂青松を洗ふの波に浴ぎ、歴史と人物とを關連する名所古跡を尋ねて今昔を懷想せ、「踏破天下七寸鞋」を歌ふ、豈に快からずや。

茫々たる八州平野の間を聳へ、風光幽雅の境を造る筑波の連山は、奇巖怪石、參天の老木を負ふて左右に屹ち、峻峰重疊、綿々北に走りて絶へざる処、懸崖千仞登攀すべからざるが如きも、之に近けば溪水潺湲として流れ、野花自然に笑ひ、青々たる綠草と客を迎へて楊を假去、翠色鮮かにまて衣を染めんと欲す、斷崖高きと雖も百草之は纏繞て茂り、清水之を穿ちて走り、或は巖頭を懸りて百尺の素練を垂し、或は尖石に碎けて銀珠を揚ぐ、絶壁峻まると雖も百花之は咲き、野鳥自由な嘯る、若ま春風の烟れる、秋月の冷やかなる、孰れか自然の眞美を尽さざるなき、將九夏の晨天を刺す杉松の綠濃かま、飛泉涼風を送りて苦熱の嘆を忘れまむ、露を拂つて兩山峻帶の間を登り、葉山里、龜岡、白瀑の勝を探り、武田藤田等の水戸浪士か、快然疾風の如く諸陣を掃蕩して進みたる當時を思へど、颯爽の風、英發の氣、人をまて轉た欣慕に堪へざらまむるものあり。

一頭群峰を抜きて自ら雄壯の風ゆる八溝山を登りて、天工鬼斧の妙に驚き、鬱乎たる松風、千軍万馬の聲をなま

て到る加波山々頭も、衣を振つて豪然長嘯まつ、無心の雲と語り、振鈴の聲幽かま響き、老鳥神殿に嘯る足尾山も嶮ぢ、森々たる老杉の中を屢階まて、雲外万里の遠きを望み、鵬翼一揮、九天を冲るの氣を養へば、雅量洋々とまて春海の如きま至るへし。

我郷の天地と獨り山靈の秀絶なるのみならず、亦ま水色の明媚なるを見るへま、流きて尽きざる利根の清流もは帆影風も亂きて白鶴の舞ゆか如く、下野より來る渡良瀬川を合せて更に水勢を加へ、東奔三十里として海に注ぎ坂東太郎の名を以て、雄名夙も天下に顯れる、水青くまて水層を激ま、瀬に觸る石に碎けて珠玉亂る、が如く、淙々聲を發まて四時天然の妙曲を奏する鬼怒の急流もは、群魚激洑貫を作りて跳り、釣りて以て夏日の勞を慰ひべく、澁波静かま溶まて清き那珂川と、煙霧水面を浸まて、閑雅幽邃、俗塵を洗ぬるものあり。

若ま夫を筇を音も名高き袋田の瀧も曳のんか、白勢四十丈峨々たる山嶺より、來り、忽ち折れて四段とあり、恰も百道の白龍を九天より懸けたるが如く、水勢奔迸、岩を裂き雲を破りて號下す、續粉崖を打ちて千山の雪を捲き、潭下の石を噴んで、奔沫煙を吐き珠を飛ばす処、天地一白、朝陽之を輝けど、紫電一閃、紅を吹きて眼を眩す正も是れ「万丈珠簾捲月來」もの、四度の瀧の名天下に隠くれなく、眞も宇宙の壯觀なり、加臨る地は山村僻邑の間にあるを以て未だ俗人の杖を曳くもの少なく、大氣新鮮まて靜氣人を襲ひ、避暑の地とまては、實も絶好の勝地あり。

袋田瀧の壯觀も飽かば、去りて大洗の清景を賞すべま、大洗岬は磯濱町の北海岸、水戸市を距る東方四里の所あり、岬は海中に突出すると三町余、奇岩怪石の波間も併立する処、白沙青松之を圍んで風光清絶あり、大洗神

社は海を抜きて高き岬角より、古木森々、晝尚や蔭をみす間も、「千級磴道與雲連」の觀形を、石階登り尽きて陣を放てば、極目千里の風光を賞すべく、天外万里の米州より太平洋を捲き來る大濤と、沸々山の崩るゝが如く岩角は激去、怒號して飛沫泡雪を散らす、若し夫れ一度波濤將軍が長風を鞭ち、進潮に乗せて突貫來る時は壯絶快絶、眞天下の壯觀也、海岸は一瀑たり彈琴といふ、飛び散る頃は霧となりて清趣愛すへ、海水は浴する者直來りて瀑下より立てば、精神壯快、暑熱の何物なるを忘るべし、海岸の魚來庵、金波樓等は皆清潔にして涼風室を通去、塵して海上の風色を双眸中より收むるを得へ

霞浦の勝も亦た避暑の地として棄つべからず、湖は行方、新治、信太、河内の四郡の間より、周圍三十六里の大湖ありて、高浪、土浦、古渡の三湖より成り、牛堀に至りて浪逆浦を通ず、其沿岸より立ちて眼を水天界際の際に放てば、渺茫たる其水天地を浸し、浩蕩たる其湖異域を通ず、其静なる時は一碧明鏡の如く、静波細紋を描きて倒影底より沈み、音も名高き浮鳴と、波の滯り塵を擱け、嫣然媚を透して呼べば應へんと欲し、白帆幾條其間を點綴して來る、然れども其怒るは當てや、波濤洶湧、風は激して奔馬の如く、岩角は碎けて雪花とあり、漁舟を捲きて奈落底より沈没せしむ、若し夫れ風穩かよ波静かなるの時、小舟を備ふて釣魚の樂を試みんか、紫の三十六鱗水を堰きて波を起し、巨口細鱗激濤として籠を充たすへ

山水は風光も飽かど、乞ぬ去りて名所舊跡を探き、興國年間足利高氏、海内の兵を擧げて鳴張を極よるの時、絶代は忠臣北島親房、護其親王の命を奉て義旗を翻し、回天の偉業を試みんと欲したる高節雄風、今も其跡を尋ねべき關城は、堡壘既に頽れて桑田と變去、雜草亂れて青く、僅も胡騎の料を印するに過ぎずと雖も、方

廿町の間、鬱乎たる古松は高丘に聳へ、松風万馬の到るが如く角聲俄かに、夢を破りて戎戟閃々空を刺すを覺ゆるあり。

清風滿野の青草を掃ひ、關外春老て落花風に亂る、の時、鐵蹄馬上に刺を横め俊爽たる將軍、櫓を敷き戈を枕にすると十年、戰袍既に綻び鬢髮雪の如し、仰て紛たる香雪を望み、悵然として眼底無量の涙あり、忽ち快然願みて「吹く風を勿來關と思ひどもみちもせにちる山櫻花」と歌ひし勿來關は、青草地を蔽ふて當年の觀なしと雖も老杉の葉蔭に孤立する斷碑の下には、勇士の長恨を宿して過ぎし昔を憶ふべし。

此他借樂園に遊んで烈公の遺物を見、鹿嶋神社を拜して要石は奇を賞し磯崎に遊んで海上万里の風光に飽き、西山に至りて靜觀の妙境を探り、草芊々たる女化、鹿田の原野に、牧畜、開墾の様を知り、守屋町を尋ねて平將國が城廓の遺趾を探り、新郷村に足利公方の據りて雄を振ひたる趾を尋ねれば、客心自ら幽に漫遊集中の詩題は求めすして詩箋に充ち、吾人をして自然に詩仙たらしむるべきなり。

我郷の山河は夫れ此の如く、凡山谷河と其趣を異にし山光水色共に一種の特色を有す、語に曰山水秀靈の氣偉人を造成すと、我郷の天地小きと雖も、山には筑波の高きあり、以て郷人が壯烈斗牛を貫かんと欲する意氣を養ふに足らざるり、河には利根の深きあり、以て郷人が五州に透徹するの識見を養ふに足らざるか、沼には霞浦の大あるあり、以て郷人が天空海湖の洪量雅懷を養ふに足らざるか。

此偉麗秀特なる山水の間に成育する我郷人にして、仰て群峰を望むの日我山靈の凡ならざるを悟らば、彼の陋汚の念を抛ち去り、秀逸の風神を發揮し、愛郷の精神を感發するを得て以て、温威筑波の如き好丈夫たるに至るべく

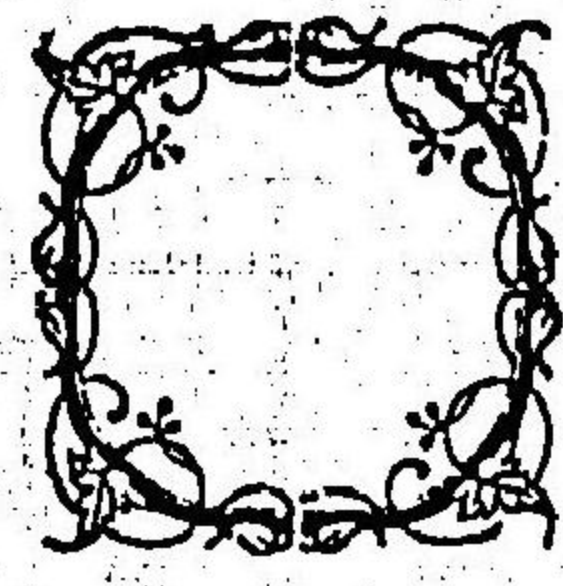
俯して河海を窺視の時、我水伯の俗ならざるを想へば、彼の偏狹の量を洗ひ尽して壯大魁偉の氣を惹き起し、忠烈の氣風を發展し、て以て滯沛利根の如き君子となるに至るべしと。

然ぞと雖も若き我郷人にして此に注意する處なく、棄て、顧みざるを今日の如くんば、山水の秀麗も亦た何ぞ化育の勢力あらんや、英靈の山河は偉人の起つを待つ、我郷人に来て起たずんば、此秀麗の山河を奈何せん抑も亦た我郷國の前途を奈何せん、記せよ自然は吾人か最後の良師あることを。

春陰垂野草青々。時有幽花一樹明。晚泊孤舟古祠下。

滿川風雨看湖生。蘇子美

埋木の春の色とや残るらん朝日かくれの谷の白雪 土御門院



明治三十年一月三日出版
明治三十年一月十日發行

定價 金拾五錢

茨城縣眞壁郡下館町九十七番地

著述兼發行人 瀧 興 治

茨城縣眞壁郡下館町五百五番地

印刷人 佐藤 順 吉

全縣全郡全町九十七番地

發行所 台 水 堂

全縣全郡全町五百五番地

發賣所 曠 進 舎

漁業艦隊論 全

正紙再 價數版 拾八近 錢頁刻

瀧台水君著

本書は從來非賣品たりしか近日之を増補して再版に附し非常の廉價を以て發賣せんとす大方諸君乞ふ速かに購讀して著者が所謂經濟的軍備策なるものを知れ

本書に對する各新聞雜誌の批評

○讀賣新聞 本書は其表題の示すが如く漁業艦隊を組織して遠洋の遺利を獲るは今日の急務にして其得たる莫大の利益は以て直接に我が軍備を擴張するの一大基礎なる所以を痛論せり

○國民の友 漁業艦隊論は經濟的軍備策と爲す所軍備の必要より水産業を盛んにして清國と全盟するの得策たるを論之漁業艦隊組織より生ずる利益を擧げて結論す説く所頗る熱心なり

○日々新聞 (前略)専ら軍備擴張の必要よりして漁業艦隊組織の急務を論し其目的本務及其利益を説き日清全盟策退職海軍士官の處置法等にも論及したる小冊子にして頗る愉快の文字あり

○東京朝日新聞 外國獵船の跋扈年に益々甚だしく而して邦人の遠洋漁業に至りては殆んど莫し實匪徒らに他の取るに任す豈浩歎に勝へんや瀧氏茲に見るありて此漁業艦隊を作る一小冊子なりと雖も其事や大なる一

名を經濟的軍備策といふ誇言にあらざるなり

○自由新聞 軍備擴張は方今の大急務あり然れども之を完全ならしめんにには多くの富を要す而きて富を生ずるには先づ漁業艦隊を組織すへいとの意見を説きたるもの袖珍の一小冊子あれども論する所は大なり再版は著者か非賣品として之を頒布するは國家の爲め實に漁業艦隊の爲め熱心なるに感するなり

○右の外國民新聞東京經濟雜誌其他各新聞雜誌の批評あれども餘白をけり之を略す

次城縣眞壁郡下館町九十七番地

全縣全郡全町五百五番地

發行所 台水堂

發賣所 佐藤順吉

